本邦高齢者ノ耳鼻咽喉科領域ニ於ケル 臨牀所見ノ統計的觀察 (其一)

耳鼻咽喉科領域全般ニ亘ル臨牀所見

II. Okano: Klinisch-statistische Untersuchungen der japanischen
Greise in dem oto-rhino-laryngologischen Gebiete.

I. Abteilung: Allgemeines.

東京帝國大學醫學部耳鼻咽喉科教室 (主任 増田教授)

岡 野 治 三

目 次

第一章 緒 言

第二章 耳科領域所見ノ統計的觀察

第一節 外 耳

第一 耳 翼

- (一) 耳翼ノ大サ
- (二) 畸形。腫瘍。其他ノ疾患

第二 外 聽 道

- (一) 耵 耨 栓 塞
- (二) 外聽道異物
- (三) 外聽道ノ炎症性疾患

第二節 鼓 膜

第三節 中 耳

- 第一 歐氏管ノ疾患
- 第二 中耳炎及ビ其殘胎症
- 第三 乳嚢突起炎

第四節 內 耳

第三章 鼻科領域所見ノ統計的觀察

第一節 外鼻及ビ鼻前庭

第二節 固有鼻腔並ニ副鼻腔

第一 鼻 中 隔

- (一) 形 態 異 常
- (二) 炎症性疾患並ニ中隔穿孔等

第二 固有鼻腔並ニ副鼻腔ノ諸疾患

(一) 固有鼻腔ノ炎症性疾患

- (イ) 急性並ニ慢性炎症
- (ロ) 眞正臭鼻症
- (ハ) 粘液鼻茸

(二) 副鼻腔ノ炎症性疾患

第四章 咽頭科領域所見ノ統計的觀察

第一節 咽頭ノ炎症性疾患

第一 急性並ニ慢性咽頭炎

第二 特殊性疾患

第二節 扁桃腺

常態並ニ肥大症

第三節 咽頭ノ腫瘍其他ノ異常

附。口腔疾患

第五章 喉頭科領域所見ノ統計的觀察

第一節 喉頭ノ炎症性疾患

第一 急性並ニ慢性喉頭炎

第二 假聲帶肥大症

第三 特殊性疾患

第二節 喉頭腫瘍

第三節 其他ノ病變

第六章 總 括

第 一 章

緒 言

吾ガ耳鼻咽喉科領域ニ於ケル臨牀所見ノ統計的觀察ノ報告セラレタルモノハ、歐米並ニ我國ニ於テモ其數少カラザルモノアリ。然レ共其60歳以上ノ老人ニ就キテ爲サレタルモノニ至リテハ未ダ甚ダ多カラズ。泰西ニ於テハ Bezold, Richter, Sporleder, Zwardemaker, O. Mayer, Siebenmann 等ノ諸氏ヲ數フレ共、我國ニ於テハ僅ニ宮田氏が大正6年本會報ニ發表セラレタルモノヲ見ルノミナリ。然モ宮田氏ハ耳科領域ニ於ケル統計的觀察ヲ發表セラレタルノミニシテ、鼻咽喉科領域ニ關スルモノニ至リテハ記載セラル、所ナシ。偶々余ハ内務省社會局ノ主管セル養老院浴風園ニ於テ60歳以上ノ男女老人多數ヲ觀察スルノ機ヲ得タルヲ以テ、先ヅ耳鼻咽喉科全般ニ亙リテ臨牀的ニ之ヲ觀察シ、更ニ進ンデ耳科領域ニ於テ精細ナル機能検査ヲ行ヒテ其成績ヲ統計的ニ觀察セルヲ以テ、茲ニ其詳細ニ亙リ報告シテ諸彦ノ御參考ニ供シ、併セテ御教示ヲ得ントスルモノナリ。

被 檢 者

本研究ニ際シ觀察シタル人員ハ總數562名ニシテ、中男子290名、女子272名ナリ。之ヲ年齡別ニ見ル時ハ第1表ニ示ス如ク60歳代194名(34.5%)、70歳代277名(49.3%)、80歳代88名(15.7%)、90歳以上3名(0.5%)ニシテ、即チ被檢者ノ約半數ハ70歳代、 $\frac{1}{3}$ ハ60歳代、80歳代ハ其約 $\frac{1}{6}$ 、90歳以上僅ニ3名ニシテ其中男子ノ1名ハ101歳ノ高齢者ナリ。

第 二 章

耳科領域所見ノ統計的觀察

第一節 外 耳

第一 耳 翼

(1) 耳翼ノ大サ。耳翼ハ青壯年期ニ於テハ未ダ其基礎組織タル耳翼軟骨基質及ビ軟骨膜中ニ存スル多數ノ彈力纖維ニヨリ其前外面ハ強キ凹窩ヲナセドモ、老年期ニ至ルニ從ヒ之等ノ彈力纖維ハ漸次減少シ爲メニ耳翼ノ彈力性ハ漸ク減ジ、從ツテ其凹窩モ亦漸次淺クナリ、之等ノ結果耳翼ノ大サハ外見上増大ストハシュワルベノ説ク所ナリ。吾國ニ於テモ古來耳翼ノ大ナルハ福德長壽ノ相ナリト俗間ニ稱ヘラレタル所ナルガ、余ハ耳科的觀察ニ當リ一見シテ老人耳翼ノ青壯年者ノ夫レニ比シテ一般ニ著シク大ナルモノアルニ氣附キタリ。而シテ同ジク耳翼ノ大ナル者ニアリテモ軟骨基礎ヲ有スル部ノ主トシテ大ナルモノ、耳朶ノ特ニ大ナルモノ及ビ兩者共ニ大ナルモノ等ニ區別スル事ヲ得ベシ。

試ミニシュワルベノ所謂長徑並ニ幅徑ヲ男女213名(男子104名、女子109名)ニ就テ計測セシニ第2、第3、第4表ニ示ス如ク長徑ハ男子ニ於テハ62—84mm、女子ニ於テハ58—86mm、平均男子右側73.4mm、左側72.6mm、女子右側72.9mm、左側70.4mm、幅徑ハ男子ニ於テ26—43mm、女子ニ於テハ29—42.5mm、平均男子右側34.6mm、左側33.6mm、女子右側36.5mm、左側35.2mmナリ。更ニ各年代ニ就テ見ルニ男子ニ於テハ平均長徑60歳代ニテハ71.1mm、70歳代ニテハ73.9mm、80歳代ニテハ74.1mm、90歳以上ニテハ80.5mmヲ示シ、平均幅徑ハ60歳代ニテハ33.6mm、70歳代ニテ

ハ 33.8mm, 80 歳代ニテハ 34.8mm, 90 歳以上ニテハ 38.8mm ナリ。又女子ニ於テハ平均長徑ハ 60 歳代ニテハ 71.0mm, 70 歳代ニテハ 72.2mm, 80 歳代ニテハ 73.6mm, 90 歳以上ニテハ 76.0mm ヲ示シ。平均幅徑ハ 60 歳代 35.1mm, 70 歳代 36.0mm, 80 歳代 36.9mm, 90 歳以上 36.8mm ナリ。即チ男女ヲ通ジ長徑、幅徑共ニ青壯年者ノ夫レニ比シ著明ニ大ニシテ、尙ホ男女共年齢ノ進ムニ從ヒ長徑幅徑共ニ其平均値ノ増大スルヲ見ル。而シテ男女ヲ比較スルニ長徑ニ於テハ男子ハ女子ニ優レタレ共、幅徑ニ於テハ却ツテ女子ハ男子ニ優レルノ現象ヲ呈ス。更ニ同一人ニ於テモ左右ニ於テ其大サハ異ルモノ多ク、右側ハ左側ニ比シ一般ニ大ナルヲ見ルハ興味アル事實ナリ(詳細ハ第 5 表ニ掲グ)。

今之ヲシュワルベノ獨逸ニ於ケル統計ニ比スルニ第 6 表ニ示ス如ク獨逸人耳翼ノ長徑ハ成人男子ニ於テハ 50—82mm, 女子ニ於テハ 50—77mm ニシテ平均男子ニ於テハ右側 65.9mm, 左側 65.5mm, 女子ニ於テハ右側 62.3mm, 左側 61.5mm ナリ。幅徑ハ成人男子ニ於テ 32—53mm, 女子ニ於テ 28—45mm, 平均男子右側ニ於テ 39.2mm, 女子ニ於テ 36.2mm ナリ。即チ平均長徑ニ於テハ男女共ニ我が老人ノ方明カニ大ニシテ、幅徑ニ於テハ男子ハ彼ニ及バザルモ女子ハ大體同様ナル數値ヲ示セリ。更ニ長徑ニ於テ 70mm 以上ノ者ヲミルニ第 7 表ニ示ス如ク、60 歳代ニ於テハシュワルベノ 36.3%ニ對シ吾ノ 71.0%, 70 歳代ニ於テハ彼ノ 62.5%ニ比シ吾ノ 83.2%, 80 歳代ニテハ吾ノ 89.7%, 90 歳以上ハ 100.0%ヲ示シ、即チ 70mm 以上ノ長徑ヲ有スル者ハ獨逸人ヨリモ邦人ノ方遙ニ多數ニシテ、然モ年代ノ進ムニ從ヒ百分比ノ増加ヲ

見ルモ亦興味アル事ナリ。

(2) 畸形、腫瘍、其他ノ疾患。

耳翼ニ見ラル、諸種畸形中余ノ觀察シ得タルモノハ先天性耳瘻孔並ニ過剰耳ノミニシテ其他ハ之ヲ發見セザリキ。先天性耳瘻孔ハ男子ニ 4 名(1.4%), 女子ニ 5 名(1.8%), 合計 9 名(1.6%)ナリ。之ヲ先人諸氏ノ頻度ニ比スルニ根尾氏ノ 7.79%, 平川氏ノ 3.3%, オノディーノ 1.5%, 永井氏 0.75%等アリテ、余ノ頻度ハ大約 オノディーノ モノニ近シ。

過剰耳ハ 65 歳ノ男子ノ左耳及ビ 75 歳ノ女子ノ右耳ニ各々 1 例ヅ、ヲ發見シ。共ニ耳珠ノ前上方ニ小豆大ノ小肉塊トシテ廣基底ヲ以テ皮膚ニ附着シ居リシモノナリ。

腫瘍トシテ觀ラレタルモノハ女子ニ於テ黃色腫(Xanthelasma) 3 例(1.1%), 男子ニ於テ「アテローム」3 例(1.0%)ニシテ其他ハ之ヲ見ズ。

其他ノ疾患トシテハ男子ニ於テ 2 例(0.7%)ノ耳血腫癰痕ヲ、更ニ男女各 1 例ニ於テ外傷ニヨル耳翼上半部ノ缺損ヲ認メタリ。

尙ホ之等ノ詳細ハ第 8 表ニ表スガ如シ。

第二 外 聽 道

高齢者ノ外聽道ハ青壯年者ノ夫レト著シキ差異ヲ認ムルコト少ク、一般ニ男子ノ外聽道ハ女子ノ夫レニ比シテ幾分廣潤ニシテ且ツ入口部並ニ耳珠ノ外側面、邊緣部及ビ對耳珠、耳殼窩等ニハ屢ニ剛毛ノ密生セルモノヲ觀ル。

(1) 耳聾栓塞。

耳鏡検査ニ當リ最モ屢ニ遭遇シタルモノハ耳聾栓塞ニシテ、第 9 表ニ示ス如ク男子ハ 60 歳代ニ於テ 27.6%, 70 歳代ニ於テ 29.5%, 80 歳代ニ於テ 31.6%, 90 歳以上ニ於テハ 100.0%ニ之ヲ認メ、女子ハ 60 歳代ニ於テ 24.7%, 70 歳代

ニ於テ 14.5%。80 歳代ニ於テ 32.0%。90 歳以上ニ於テハ之ヲ認メズ。男女子ヲ通ジテミル時 60 歳代ニ於テハ平均 26.3%。70 歳代ニ於テハ 22.4%。80 歳代ニ於テハ 31.8%。90 歳以上ニ於テハ 33.3%。被檢者全般トシテ見ル時ハ 25.3%ノ多數ニ於テ之ヲ認メ。コハ又全耳疾患ノ 38.4%ヲ占ムルコトナル。

從來幼少年並ニ成年者ノ耳聾性聾ニ關スル報告ハ我國ニ於テモ其數少カラズ。全國各地ノ小學兒童ニ關スルモノトシテハ大澤(40.3%)。海江田(34%)。高越(26%)。清水(24.1%)。西(22.7%)。鶴田(20.0%)。久保(15.8%)。山崎(15.5%)。吉田(15.1%)等アリ。壯丁ニ關スルモノトシテハ土屋(20%内外)。三宅(14.5%)等アリ。而シテ諸家ノ報告セル頻度ニ著シキ差アルハ其検査セル地方ニモヨル可ケレド。尙ホ耳聾性聾ノ標準ニ關スル差ガ其大ナル理由ノ一ナルベシ。

今之等ノモノト余ガ成績トヲ比較スルニ。余ノ場合ハ 25.3%ナルヲ以テ小學兒童ニ於ケルモノノ中ニテモ多數ノ方ニ匹敵シ。壯丁ニ於ケルモノヨリ遙ニ多數ニシテ。從來耳聾性聾ハ小兒ト老人トニ多シトセラルコトニ一致ス。

之ガ原因ニ關シベルベリッヒハ老人血中ニハ過剰ナル「コレステリン」含有セラレ。其爲ニ耳聾性聾ノ分泌過多ヲ來タスモノナリトシ。ボリーヅェルハ外聽道軟骨ノ收縮ニヨリ外聽道内腔ノ狹小ヲ來タスヲ主ナル原因トセシガ其他ニ剛毛ノ密生。異物等モ亦一役ヲ演ズルモノナル可ク。更ニ老人ニ於テハ一般ニ感覺ノ鈍麻ヲ來タスヲ以テ外聽道ノ清拭ニ意ヲ用フル事少ク。之ガ耳聾性聾ヲ來タス又一ノ原因ヲナスモノトモ考ヘラル。即チ耳聾性聾ヲ有スル老人ハ多クハ

鈍重ナルニ反シ。智能ノ未ダ衰ヘザル者ニハ之ヲ認ムルコト少キガ如シ。

(2) 外聽道異物。

耳聾性聾ニ關聯シテ見ラレタルモノニ外聽道異物アリ。全被檢者中男子 2 名(0.7%)。女子 2 名(0.8%)。合計 4 名(0.7%)ニ發見セラレ。其種類ハ男子ノモノハ一ハ草ノ實。一ハ蠅ノ死骸ガ耳聾性聾ノ中心ヲナセルモノ。女子ニ於ケルモノハ一ハ新聞紙片。一ハ紙裂縫ニシテ。男子ノモノハ兩者共自覺の症狀殆ンドナカリシ爲メ偶然發見セラレタリ。女子ノ第 1 例ノモノハ聽覺過敏ノ存スルヲ以テ外界ノ騒音ヲ遮斷センガ爲メ兩側外聽道ニ新聞紙片ヲ挿入シ居タルモノ。第 2 例ハ異物存在ヲ自覺セズ。外聽道ニ癢痒感アリシ爲メ挿入セルモノガ殘存セルモノ。如ク。検査ニ當リテ偶然發見セラレタルモノナリ。

(3) 外聽道ノ炎症性疾患。

外聽道ノ炎症性疾患中認メラレタルモノハ第 10 表ニ示ス如ク。急性炎ハ限局性ノモノ、ミ見ラレ。慢性炎ハ瀰漫性ノモノ、ミニシテ殊ニ 77 歳ノ男子 1 名及ビ 85 歳並ニ 76 歳ノ女子 2 名ニ於テ認メラレタルハ。慢性炎ノ爲ニ外聽道骨壁ノ破壊ヲ來タシ。汚穢分泌物中ニ多數ノ小骨壞疽片ヲ發見セリ。之ガ原因ニ關シテ考察スルニ是等三者ノ中男子ノモノハ血液ノワ氏反應陰性ナレ共。女子ノ 2 名ハ孰レモワ氏反應陽性ナルヲ以テ。コハ恐ラク外聽道ニ於ケル微毒性病變ニヨルモノナル可シ。尙ホ外聽道炎痕跡中ノ大部分ハ斯クノ如キ病變ノ爲ニ外聽道ノ異常廣潤ヲ來タシ。道腔ハ正常ナルモノ、殆ンド 2—3 倍ニモ達シ。更ニ不完全ナル中隔形成等ノ認メララルモノ多シ。尙ホ女子ノ 1 例 81 歳ノモノ

ニ於テハ慢性穿孔性中耳炎ヲ伴ヘル慢性外聽道炎ニシテ、骨增生ノ爲ニ道腔ハ著シク狹小トナリ。漸ク耳用消息子ヲ通ズル程度トナレルヲミタリ。

第二節 鼓 膜

鼓膜ハ高齢トナルニ從ヒ漸次濁濁ヲ來タスモノ多シ。而シテ其濁濁ノ最初ニ發現スル部位ヲ觀ルニ多クハ前下部ヨリ後下部ニ亘レル邊緣部ニシテ、鼓膜臍部ヲ中心ニ其周縁ニ現ハル、所謂中心性濁濁並ニ後上部ニ恰モ内陷鼓膜ノ後皺襞ノ如クニ現ハル、モノ之ニ次グ。而シテ是等ノ濁濁ハ漸次鼓膜全般ニ及ブモノ多ク、爲ニ反射光錐ノ消失セルモノ多シ。更ニ老人ノ鼓膜ヲ仔細ニ觀察スルニ其後半部ハ前半部ニ比シテ一般ニ見掛上著シク小ナルモノ多シ。コハ恐ラク何等カノ原因ニヨリテ鼓膜ノ外聽道長軸ニ對スル傾斜度ニ變化ヲ來タシ。靑壯年者ノ夫レニ比シテ少シク水平ニ近クナル爲ナランカ。反射光錐消失者ノ狀況ヲ表示スレバ第 11 表ノ如シ。然レ共 80 歳以上ノ老年者ニ於テモ尙ホ靑壯年者ノ鼓膜ト何等變ル所ナク、菲薄ニシテ絹絲樣光澤ヲ有シ反射光錐ノ立派ニ存在スルモノモ稀ニハ發見セラレ。斯カル鼓膜ヲ有スルモノハ多クハ尙ホ良好ナル聽力ヲ保存スレ共、然モ鼓膜所見ト聽力トハ尙ホ必ズシモ並行セルモノニ非ザルハ興味アル事ナリ。

尙ホ老人ニ於テハ屢々鼓膜ノ後上部ヨリ外聽道後上部ニ亘リテ小出血點ヲ認ムルモノアリ。斯クノ如キ患者ハ孰レモ高血壓者ニシテ頭痛、耳鳴等ヲ有スルモノナルガ、中ニハ何等他ニ自覺的症狀ナキモノモ認メラレタルヲ以テ、此出血點ハ或ハ高血壓ノ指標トシテ鼻出血ト共ニ注意セラル可キモノニ非ズヤト思惟セラル。

第三節 中 耳

中耳ニ於テ觀ラレタルハ歐氏管狹窄、急性並ニ慢性中耳炎、急性乳嚢突起炎、中耳炎殘胎症等ノ諸疾患ニシテ第 12 表ノ如シ。

第一 歐氏管ノ疾患

中耳ノ諸疾患中最モ屢々觀ラレタルモノハ歐氏管狹窄ニシテ第 12、第 13、第 14 表ニ示ス如ク、男子ニ於テ 58 名(男子被檢者ノ 20.0%)、女子ニ於テ 68 名(女子被檢者ノ 25.0%)、合計 126 名(總被檢者ノ 22.4%)アリ。之ヲ各年代別ニミルニ男子ハ 60 歳代 23 名(男子 60 歳代被檢者ノ 21.9%)(以下同様各年代被檢者ニ對スル百分比ヲ記ス)、70 歳代 31 名(21.2%)、80 歳代 4 名(10.5%)、90 歳以上ニハ無ク、女子ハ 60 歳代 22 名(24.7%)、70 歳代 36 名(27.5%)、80 歳代 9 名(18.0%)、90 歳以上 1 名(50.0%)ナリ。更ニ男女合計ニ於テ之ヲ見ルニ 60 歳代ニ於テ 45 名(23.2%)、70 歳代ニ於テ 67 名(24.2%)、80 歳代ニ於テ 13 名(14.8%)、90 歳以上 1 名(33.3%)ニシテ、即チ其頻度ハ 60 歳代並ニ 70 歳代ニ於テハ著シキ差異ヲ認メザルモ 80 歳以上ニ及ベバ著明ニ減少ス。

更ニ兩性間ノ頻度ヲミルニ男子ノ 20%ニ對シ女子ハ 25%ニシテ女性ノ方少シク多シ。尙ホ兩側罹患セルモノハ男子 23 名(7.9%)、女子 25 名(9.2%)、右側ノミノモノハ男子 24 名(8.3%)、女子 27 名(9.9%)、左側ノミノモノハ男子 11 名(3.8%)、女子 16 名(5.9%)ナルガ、歐氏管疾患患者ノミニツイテ之ヲミルトキハ右側ノミノモノハ其 40.6%、左側ノミノモノ 21.4%、兩側ノモノ 38.1%ニシテ、即チ左右ヲ比較スルトキハ右側ハ左側ニ比シテ約 2 倍ノ頻度ヲ示シ、一側ノミノモノハ 62.0%ナルヲ以テ兩側ノモノヨリ

モ遙ニ多シ。

歐氏管狭窄ノ頻度等ニ關スル文献ハ洋ノ東西ヲ通ジテ餘リ多クヲ見ザル所ナルガ、主ナルモノヲ舉グレバベツオールドハ耳疾患者ノ9.7%ニ歐氏管疾患ヲ認メ(然モ其99%ハ歐氏管狭窄ナリ)。其中一側ノミ侵サレタルモノ23%、兩側ノモノ77%、而シテ年齡ノ進ムニ從ヒ漸次減少スト記載セリ。鰐淵氏ハ耳疾患者ノ15%ニ之ヲ認メ、男性ハ女性ノ1.4倍ニ當リ、兩側罹患セルモノ51.6%、左側ノモノ26.6%、右側ノモノ21.7%、之ヲ年齡別ニミルトキハ10—20歳ノモノ23.1%、20—30歳ノモノ23.3%ニシテ最も多ク、30歳以上ハ年齡ト共ニ減少シ、10歳以下ハ9.6%ニ過ギズト記載セリ。

今是等文献ニミラル、モノト余ガ場合トヲ比較スルニ、最も注目ス可キハ全體トシテノ頻度ナリ。即チ先人諸家ハ孰レモ歐氏管狭窄ハ年齡ト共ニ減少スト記載スレ共、余ノ觀察シタル所ニヨレバ總被檢者ノ22.4%、耳疾患者ノ34.1%ニ之ヲ發見シタルヲ以テ、コハ諸家ノ記載セル青壯年者ノ頻度ニ比シ決シテ少キモノニ非ズ、或ハ却ツテ多數ナリトサヘ觀ラル、所ニシテ、80歳代ニ至リ初メテ著明ニ減少セルヲ見ル。由是觀之本症ハ老人ニ於テモ可成リ多數ニ存在シ難聽、耳鳴等ノ重要ナル原因ノ一ヲナスモノト考ヘラル。

第二 中耳炎及ビ殘貽症

急性化膿性中耳炎ハ男子3名(1.03%)、女子4名(1.5%)、合計7名(1.2%)ニミラレ、其經過ハ孰レモ特ニ記載スベキ程ノコトモナカリキ。

慢性化膿性中耳炎ハ男子7名(2.4%)、女子5名(1.8%)、合計12名(2.1%)ニシテ、分泌物ハ

粘液性或ハ粘液膿性。穿孔ノ大サハ小ナルモノ4、中等大ノモノ7、全缺損3、孰レモ中心性穿孔ナリ(尙ホ第15表參照)。

中耳炎殘貽症ハ歐氏管狭窄ニ次イデ多數ニミラレタルモノニシテ男子19名(6.6%)、女子20名(7.4%)、合計39名(6.9%)ヲ算シ(詳細ハ第12表)。此中37耳ニ於テハ鼓膜ニ穿孔ノ癰痕ヲ認メ、2耳ニ於テハ永續性穿孔ノミヲ、他ノ2耳ニ於テハ石灰沈着ノミヲ認メタリ。而シテ穿孔ノ癰痕ヲ有スル鼓膜ニ於テハ癰痕部以外ハ大多數ニ於テ高度ノ溷濁ヲ呈シ、尙ホ3耳ニ於テハ比較的大ナル穿孔癰痕ガ鼓室内壁ト癒着セルヲ認メタリ。

第三 乳 嘴 突 起 炎

急性乳嘴突起炎ハ男子ニ於テ68歳及ビ72歳ノモノ、2名(0.7%)、女子ニ於テ67歳及71歳ノモノ、2名(0.7%)、合計4名(0.7%)ニ觀ラレタリ。而シテ是等ノ者ハ孰レモ局所麻醉ノ下ニシュワルツェ氏術式ニ依リ乳嘴突起鑿開術ヲ行ヒタルガ、手術後創腔内肉芽ノ發生頗ル良ク、全身狀態ニモ何等影響スル所ナク、孰レモ良好ナル經過ヲトリテ全治セルヲ以テ、茲ニ之ヲ附記シテ高齢者ノ急性乳嘴突起炎ニ於テモ慎重ナル注意ノ下ニ手術ヲ行フトキハ十分ナル良果ヲ得ラル、モノナル可キヲ以テ吾人ハ手術ノ適應症ノ存スル場合ニハ全身狀態ニ注意ス可キハ勿論ナレ共若シ手術ニ堪ヘラル、如キ狀態ノ場合ニハ躊躇スル所ナク手術ヲ敢行ス可キモノナラント信ズル次第ナリ。

第四節 内 耳

内耳ニ關シテハ本篇ニ於テハ單ニ所謂老人性難聽ニ關スルモノ、一端ノミヲ記スコト、シ、詳細ナル官能檢查成績ニ就テハ本論文其2ニ於

テ記述ス可シ。

高齢トナルニ從ヒ聽力ノ減退スルモノ漸次其數ヲ増ス事ハ從來ヨリ認メラレタル所ナルガ、余ハ検査ニ際シ常ニ自覺的ニ難聴、耳鳴等ノ存スルヤ否ヤヲ質問スル所アリシガ、其結果ハ第16表ニ示ス如ク、60歳代ニ於テハ男子22.9%、女子29.2%、男女合計25.8%、70歳代ニ於テハ男子39.0%、女子41.2%、男女合計ニテ40.1%、80歳代ニ於テハ男子52.6%、女子72.0%、男女合計ニテ63.6%、90歳以上ニ於テハ男女共100%ニ於テ難聴者ヲ見出シタリ。即チ男女共ニ年代ノ進ムニ從ヒ難聴者ハ著明ナル増加率ヲ以テ増加シ、尙ホ女子ハ男子ヨリ多數ニ難聴ヲ訴フル者アル等ノ成績ヲ得タリ。尤モ老人ノ中ニハ他覺的ニハ相當高度ナル難聴アルニモ拘ラズ、自覺的ニ之ヲ悟ラザルモノモ屢々見受ケラレ、殊ニ會話音ニ些シテ不自由ナキ程度ノ者ニ於テ然ル者多カリシヲ以テ、實際上ノ難聴者ノ百分比ハ更ニ大ナルモノアルハ本論文其2ニ示ガ如シ。

尙ホ興味アルハ耳鳴ニシテ、其性質ハ概シテ高調持續性ナルモノ多ク、其發現ハ自覺的ニ難聴ヲ訴フル以前或ハ遅クモ夫レト殆ンド同時ナルモノ多ク、之ヲ年齢別ニ觀ル時ハ60歳前後ヨリ現ハルモノ多シ。而シテ斯クノ如キ耳鳴ハ二・三年一四・五年持續シテ再ビ消失スルモノ、可成多數ニ存スルヲ認メ、斯カル者ハ其時代ニ至レバ難聴ノ可成リノ程度ニ迄進行シ居ルモノ多シ。更ニ長年月耳鳴ノ持續シ居ル者ハ其割合ニ難聴ノ進行セザルモノアルガ如キハ、所謂老人性難聴ノ本態ヲ論ズルニ當リ興味アル事實ナル可シ。

第三章

鼻科領域所見ノ統計的觀察

第一節 外鼻及ビ鼻前庭

外鼻ニ於ケル先天性畸形ハ之ヲ認メザリシガ、唯76歳ノ男子ニ於テ外鼻軟骨部ノ特ニ大ナルモノ、1例ヲ觀タリ。

後天性畸形トシテ72歳ノ男子ニ於テ微毒性疾患ノ爲メニ鞍鼻ヲ呈シ、更ニ右側鼻翼部ノ大部缺損シテ溝狀癰痕性ニ内方鼻底部ニ向ツテ牽引セラレ高度ノ醜貌ヲ呈セル1例アリ。又75歳ノ男子ニ於テ狼瘡性癰痕ノ爲メニ兩側鼻入口部ハ頗ル狹隘トナリ、殊ニ右側ハ高度ニシテ漸ク捲綿子ヲ通ズル程度トナレル者アリ。更ニ又70歳ノ男子ニ於テハ痘瘡性癰痕ノ爲メニ兩側鼻入口部ハ殆ンド全ク閉塞セラレ僅ニ消息子ヲ通ズル程ナルヲ以テ鼻腔内ハ全ク検査シ得ザリシ者アリ。

女子ニ於テハ畸形ト稱ス可キ程ノ者ヲ認メズ、唯痘瘡性癰痕ノ爲メ顔面一體ニ菊目石トナリ、外鼻皮膚ニモ其癰痕ヲ殘セルモノ7例ヲ認メタリ。

尙ホ81歳ノ男子佐藤某ニ於テ、左側キーゼルバハ氏部位ニ小小豆大ノ腫瘍アリ、灰白色ニシテ球形ヲナシ硬度硬ニシテ基底組織トノ癒着ナク可成リノ可動性ヲ有シ、出血スルコトモナク一見シテ良性ナル腫瘍ナルヲ思ハシメタリ。此部ニ於ケル腫瘍ハコノ1例ノミニシテ其他ニハ特ニ記ス可キ程ノモノナシ。

第二節 固有鼻腔及ビ副鼻腔

鼻腔粘膜ハ健康ナル老人ニアリテハ蒼白色或ハ之ニ多少ノ赤色調ヲ帶ブルガ如キ色ヲ呈シ、一般ニ多少菲薄トナリ殊ニ甲介粘膜ニ於テ之ガ

稍ニ著明ニ現ハル、ガ如ク。爲ニ上、中、下ノ各鼻道殊ニ中鼻道並ニ總鼻道ノ廣潤トナレルモノ多ク。上顎竇口ノ如キハ比較的容易ニ窺ヒ得ラル、ニ至リ。更ニ鼻咽腔復壁、天蓋、歐氏管隆起等モ稍ニ明瞭ニ目撃セラル、モノ多シ。尙ホ嗅披裂モ一般ニ廣ク開放ス。

第一 鼻 中 隔

(1) 形態異常。

鼻腔検査ニ當リテ最モ屢ニ遭遇セルハ鼻中隔ノ形態異常ニシテ。第 17 表ニ示ス如ク男女共ニ彎曲症ヲ第一トス。即チ男子ニ於テハ純粹ナル彎曲症ノミノモノ 155 名(53.4%)ニシテ男子被檢者ノ半数以上ヲ占メ。更ニ彎曲症ニ櫛ヲ合併セルモノ 33 名(11.3%)アリテ約 1 割ヲ占メ。此兩者ヲ合スレバ 188 名(64.7%)トナリ大凡²/₃ノ多數ニ達ス。女子ニ於テハ彎曲症ノミノモノ 86 名(31.6%)ニシテ女子被檢者ノ約¹/₃ヲ占メ。更ニ彎曲症ニ櫛ヲ合併セルモノ 34 名(12.5%)。兩者ヲ合スレバ 120 名(44.1%)ヲ算ス。男女子ヲ通ジテミルトキハ彎曲症ノミノモノ 241 名(42.9%)。彎曲症ニ櫛ヲ合併セルモノ 67 名(11.9%)。合計 308 名(54.8%)ニシテ總被檢者ノ半数以上ニ達ス。

彎曲症ニ次イデ多キハ中隔櫛ナリ。而シテ單ニ一側ノミニ櫛ヲ有スルモノハ男子ニ於テ 25 名(8.6%)。女子ニ於テ 36 名(13.2%)。合計 61 名(10.9%)ニシテ全被檢者ノ約 1 割ヲ占メ。兩側ニ櫛ヲ有スルモノハ男子ニ於テ 15 名(5.2%)。女子ニ於テ 12 名(4.5%)。合計 27 名(4.7%)ニシテ是亦全被檢者ノ約 1 割ヲ占ム。依テ是等兩者ヲ合スレバ櫛ヲ有スルモノハ男子ニ於テ 40 名(13.8%)。女子ニ於テ 48 名(17.7%)。合計 88 名(21.0%)トナリ全被檢者ノ約 2 割ヲ占ム

ルコトハナル。

中隔棘ヲ有スルモノハ極ク少數ニシテ男子ニ於テ僅ニ 2 名(0.7%)。女子ニ於テ 3 名(1.1%)。合計 5 名(0.9%)ヲミタルニ。

以上ノ諸種形態異常ヲ性別ニミルトキハ。彎曲症ハ男子ノ 64.7%ニ對シ女子ノ 44.1%ニシテ男子ノ方遙カニ多數ナレ共。櫛ニ於テハ男子ノ 13.8%ニ對シ女子ノ 28.6%ニシテ女子ハ男子ノ 2 倍以上ヲ占ム。棘ニ於テハ症例數少キ爲メ何レトモ言ヒ難シ。即チ以上ヲ綜合スルニ諸種異常ヲ合スレバ男子ニ於テハ 230 名(79.3%)。女子ニ於テハ 201 名(73.9%)ニシテ男子ノ方少シク多數ナリ。而シテ男女ヲ合スレバ 431 名(76.9%)トナリ。即チ被檢者ノ³/₄以上ニ形態異常ノ存スルコトハナル。

尙ホ異常ノ存スル側ヲミルニ。彎曲症ニ於テハ男女共左側ニ彎曲セルモノハ右側ニ彎曲セルモノヨリ多ク男子ニ於テ 1.5 倍。女子ニ於テ 1.8 倍。平均大凡 1.6 倍ニ當ル。櫛ニ於テモ左側ニ存スルモノハ右側ノ夫レニ比シテ多數ニシテ男子ハ 1.5 倍。女子ハ 1.6 倍。平均大凡 1.5 倍ニ當ルヲ見ル。

更ニ彎曲ノ種類ヲミルニ第 18 表ニ示ス如ク C 字型最モ多クシテ 298 名(53.0%)。S 字型ハ 10 名(1.8%)ノ少數ニ過ギズ。

鼻中隔ノ形態異常(特ニ彎曲症)ニ關スル統計ハ吾國ニ於ケルモノモ可成リ存在シ吉田氏ハ初生兒ニ於テ 8.2%ニ彎曲症ヲ認メ。小中學生ニ關シテハ山崎(1.3%)。海江田(8.0%)。外山(8.0%)。大澤(13.5%)。西(26.1%)等ノ諸報告アリテ。其頻度ハ年齢ト共ニ増加スラ認メラル。成人ニ於ケルモノトシテハ神田(83.0%)。窪田(81.4%)。津田(76.3%)。大杉(60.6%)。三島

(54.9%)。高坂(歩兵聯隊ノ壯丁ニ於テ 39.8%)。三島(29.8%)等アリ。西洋ニ於ケルモノトシテハ Heymann(96.3%), Simanowski(95.0%), Jurasz(84.3%), Sedziak(83.5%), Semeleder(79.6%), Mackenzie(76.9%), Sick(75.0%), Stier(65.1%), Zuckerkindl(37.8%)等ニシテ其頻度ハ可成リ區々ナレドモ一般ニ男子ハ女子ヨリモ多ク。左彎セルモノハ右彎セルモノヨリモ多キガ如シ。余ノ場合ニ於テモ頻度ハ諸家ノモノ、中位ニアリ。男子ハ女子ヨリ少シ多ク。左彎ハ右彎ノ 1.5 倍ヲ示シ。高齢者ニ於テモ成人ノモノト大差ナキ成績ヲ示シタリ。

(2) 炎症性並ニ中隔穿孔等。

鼻中隔ニ於ケル特殊性炎症トシテ見ラレタルモノハ微毒性並ニ狼瘡性疾患ナリ。即チ微毒性ノモノトシテハ男子 3 例ニ於テ中隔ノ骨部並ニ軟骨部ニ大ナル穿孔ヲ認メ。内 1 例ハ既ニ癰疽形成ニヨリテ治癒シ居ルモノナルガ他ノ 2 例ハ尙ホ穿孔縁ニ肉芽ヲ有シ黄綠色。有臭性ノ痂皮形成盛ナルモノナリ。而シテ是等ノ病變ハ何レモ鼻腔ノミニ局限セズ。鼻咽腔ヨリ咽頭或ハ喉頭ニ迄蔓延セルモノナリ。狼瘡性ノモノハ 75 歳ノ男子ニテ鼻入口部ニ癰疽性狭窄ヲ來タセルモノニシテ中隔ニ於テハ軟骨部ニ徑 1 cm 位ノ穿孔アリ。其周縁部ニハ尙ホ肉芽ヲ有シ黄褐色ノ苔ヲ被ムレリ。

更ニ原因ノ詳ナラザル中隔穿孔ヲ 85 歳ノ男子ニ 1 例。79 歳。73 歳。73 歳。72 歳。68 歳ノ女子 5 例(1.8%)。合計 6 例(1.1%)ニ認メタリ。而シテ是等原因不詳ノ穿孔ハ何レモ中隔ノ前下部即チ軟骨部ニ存シ。形ハ圓形或ハ橢圓形ニシテ大サハ上下徑大凡 1 cm 位。前後徑大凡 1—1.5 cm。其邊縁部ハ多クハ圓滑清淨ニシテ少シク薄クナ

リ正常ナル粘膜ヲ以テ被ハレタルガ。唯女子ノ 2 例ニ於テ僅ニ其一部ニ黃色ノ薄キ苔ノ附着セルヲ見タリ。之ガ原因ニ關シテハ所謂特發性鼻中隔穿孔ナルモノヲ先ヅ第 1 ニ舉グルヲ得ベキモ。然モ尙ホ是等ノ穿孔ヲ有スル者ハ孰レモ幼時天然痘ニ罹患セル病歴ヲ有スルモノ、ミナルヲ以テ或ハ是等ノ穿孔ハ痘瘡ト何等カノ關係ノ存スルモノニ非ズヤトモ思惟セラル。

尙ホ鼻腔内癒着症(中癒着症ニシテ中隔ト下甲介トノ間ニ存スルモノ)ヲ男子ニ於テ 1 例。更ニ中隔結節ヲ男子ニ 4 例(1.4%)。女子ニ 1 例(0.4%)。合計 5 例(0.9%)ニ認メタリ。

第二 固有鼻腔並ニ副鼻腔ノ諸疾患

(1) 固有鼻腔ノ炎症性疾患。

固有鼻腔ニ於テ最モ多ク觀察セラレタル變化ハ其炎症性諸疾患ニシテ第 20 表ニ示スガ如シ。

(1) 急性並ニ慢性炎症。

其中最モ多キハ慢性肥厚性鼻炎ニシテ男子ニ 85 名(29.3%)。女子ニ 98 名(36.0%)。合計 183 名(32.6%)ニシテ總被檢者ノ約 $\frac{1}{3}$ 。ニ觀ラレタルハ注目ス可キ事ナリ。而シテ是等ノ肥厚性鼻炎ハ左右兩側ニ病變アルモノ最モ多キモ片側ノミ肥厚セルモノモ亦之ニ殆ンド匹敵或ハ凌駕ス可キ數ニ上レリ。又左側ニ比シ右側ニ遙ニ多數ニ之ヲ發見スルハ。主トシテ鼻中隔彎曲症ノ存スル者ニ於テ左彎ハ右彎ヨリ遙ニ多數ナル事實ヨリ。右側ニ於テ甲介粘膜ノ代償性肥厚ヲ來タセルモノ、多キニヨルモノト考ヘラル。更ニ是等肥厚性鼻炎ヲ有スル患者ニ於テ中。下甲介共ニ肥厚セルモノト。其肥厚ガ中甲介ニノミ顯著ナルモノトハ其數相半バスレ共。下甲介ノミ或ハ鼻中隔後端部粘膜ノミ肥厚セルモノハ割合少數ナリ。而シテ更ニ中甲介ノ肥厚セルモノニ於テ

ハ下甲介ハ殆ンド正常ナルカ或ハ却ツテ萎縮ノ像ヲ示スモノ、多キヲ觀察シタルハ興味アル事實ニシテ、老人ニ於テ鼻腔内ニ萎縮ノ發現スルハ先ヅ下甲介ヨリスル者多數ニシテ、次イデ中、上甲介其他ノ部位ニ及ブガ如ク、斯クノ如キ過程ハ若年者ニ觀ラル、萎縮性鼻炎ニ於テ、下甲介ノ萎縮高度ナルニ拘ハラズ中甲介ノ未ダ侵サレザルカ或ハ却ツテ肥厚セル者ヲ屢々目撃スルニ甚ダ酷似セルモノナリ。

肥厚性鼻炎ニ次グモノハ慢性單純性鼻炎ニシテ男子28名(9.7%)、女子34名(12.5%)、合計62名(11.0%)ニミラレ、全體ノ約1割ニ當ル。

急性鼻炎ハ其觀察ノ時期等ニヨリ其數ニハ可成リノ差ノ有スルハ論ヲ俟タザル所ナルモ、種種ナル時期ヲ平均シテ見ルトキハ男子10名(3.4%)、女子12名(4.4%)、合計22名(3.9%)ニミラレタリ。

老人ニ於テ鼻腔ニ明カナル萎縮像ヲ呈スルハ多クハ70歳以後ニシテ、60歳代ニ之ヲ觀ルコトハ頗ル少キガ如シ。而シテ余ノ場合ニ於テ特ニ著明ニ廣汎性萎縮ノ像ヲ呈シタルモノハ男子ニ於テ9名(3.1%)、女子ニ於テ10名(3.7%)、合計19名(3.4%)ノ少數ニ過ギズ。

(ロ) 眞正臭鼻症。

鼻腔ニ著明ナル萎縮像ヲ呈シ、更ニ黃綠色ノ痂皮形成ヲミタルモノ女子ニ於テ2名アリ。内1名ハ78歳ニシテ成年期ヨリ結痂アリ、多少ノ惡臭アリシト稱スルモ現在ニ於テハ惡臭ハ全ク無ク、自覺的ニ何等ノ苦痛ヲ感ゼズ、靑壯年期ニ於ケルヨリモ鼻閉塞ノ程度輕減セリトスルモノ。他ノ1名ハ83歳ニシテ現在ニ於テモ黃綠色ノ大ナル結痂ト共ニ猛烈ナル惡臭ヲ有シ、萎縮ハ中等度ナル定型的眞正臭鼻症ノ像ヲ呈

ス。而シテ是等ノ症狀ハ靑壯年期ヨリ存在シ終始一貫變ラザルモノナリ。之等2名ノ者ハ既往症ニ於テ共ニ梅毒等ヲ強ク否定シ、血液ノワ氏反應、村田氏反應共ニ陰性、副鼻腔ニモ著變ヲ認メズ。

從來高齢者ニ眞正臭鼻症ヲミルコトハ極メテ稀ナリトハ成書ニモ記載セラレタル所ニシテ、Hans Schmitzハ40歳ヨリ80歳代ニ至ル30名ノ萎縮性鼻炎並ニ臭鼻症患者ニ就テノ研究ヲ報告シ、其 $\frac{2}{3}$ ハ年齢ノ進ムニ從ヒ痂皮形成ニ於テ著明ナル輕快ヲ來タシ、3名ハ症狀依然不變、他ノ者ハ稍ニ輕快シ、症狀ノ年ト共ニ進行セル者ハ之ヲ認メザリシトセリ。余ノ2例ニ於テモ1例ハ痂皮形成消失シテ自覺的ニ殆ンド全快シタレ共他ノ1例ハ症狀依然不變ノ者ニシテ、共ニ症狀殊ニ鼻内萎縮ノ年齢ト共ニ進行セル狀ヲ認メザルモノナリ。即チLautenschlägerノ高年者ノ萎縮性鼻炎ニ特有ナリト記載セル如キ所謂「異常分泌物ノ消失及ビ炎症性症狀ノ消退ト共ニ高度ナル萎縮ヲ呈スルモノニハ非ザリキ。

(ハ) 粘液鼻茸。

粘液鼻茸ヲ見ルコトモ亦老人ニハ少カラズ。即チ男子ニ於テ20例(6.9%)、女子ニ於テ10例(3.7%)、合計30例(5.3%)ニ之ヲ認メタリ。而シテ從來鼻茸ハ女子ヨリ男子ニ多ク見ラル、モノナリト稱セラレシガ、余ノ場合ニ於テモ男子ハ女子ノ大約2倍ノ頻度ヲ有ス。尙ホ之等ノ鼻茸ハ殆ンド大部ハ中鼻道ノ前部及ビ中部側壁ヨリ發生セルモノニシテ、更ニ同時ニ副鼻腔ノ慢性炎症ニ由來セル膿汁ヲ鼻腔或ハ鼻咽腔、咽頭等ニ認メラレタルモノハ男子ニ於テ5例(男子鼻茸患者ノ25%)、女子ニ於テ4例(女子鼻茸患者ノ40%)、合計9例(全鼻茸患者ノ30%)

ニシテ、以上ノ如キ膿汁ノ認メラザリシモノハ男子15例(男子鼻茸患者ノ75%)、女子6例(女子鼻茸患者ノ60%)、合計21例(全鼻茸患者ノ70%)ナリ。即チ鼻茸ヲ有スル老人ニ於テハ同側鼻腔ノ慢性炎症ニ由來セル膿汁ヲ鼻腔、鼻咽腔、咽頭等ニ認メザルコトノ方遙ニ多ク、之ヲ認ムルハ30%ニ過ギザルハ興味アルコトニシテ、之ヲ文献ニ照スニ Grünwald ハ82例ノ鼻茸患者中61例(74.4%)ハ同側副鼻腔炎ヲ合併シ、21例(25.6%)ハ之ヲ合併セズト報告シ、更ニ A. Alexander ハ149例ノ鼻茸患者中80例(53.7%)ニ同側副鼻腔炎ヲ合併セリト記載シ、吉原氏ハ63例ノ鼻茸中41例(65.1%)ニ上顎竇炎ヲ合併セリト報告シ居ルニ比スレバ、老人ニ於テ鼻茸ヲ有スル場合ニ潜伏性副鼻腔炎ノ存否ハ今直チニ論ズルコト能ハザルモ、少ク共著明ナル症候ヲ發現シ居ル副鼻腔炎ノ合併ハ少キモノハ如シ。

(ニ) 副鼻腔ノ炎症性疾患。

副鼻腔ノ諸疾患中特ニ注目セラレタルハ其慢性炎症ナリ。尤モ此際行ヒタル検査方法ハ單ニ前後鼻鏡検査法並ニ消息法ノミニシテ、其他ノ種々ナル方法ハ併セ行ハザリシヲ以テ、其成績ハ未ダ精確ナルモノニハ非ザル可キモ、然モ之等ニヨリテ診斷セラレタル諸種副鼻腔ノ蓄膿症患者ハ男子17名(5.9%)、女子21名(7.7%)、合計38名(6.8%)ニシテ、之ヲ各副鼻腔ニ就テミル時ハ第21表ニ示ス如ク、最モ多キハ上顎竇炎ニシテ男子13名(4.5%)、女子14名(5.1%)、合計27名(4.8%)ニ認メラレ、全蓄膿症患者ノ71.1%ニ當ル。之ニ次グモノハ前額竇炎ニシテ男子4例(1.3%)、女子4例(1.5%)、合計8例(1.4%)、即チ全蓄膿症患者ノ21.1%ニ當リ、上

顎竇炎ト前額竇炎トヲ合スレバ全數ノ92.1%ヲ占ムルコトナル。

篩骨蜂巢ニ於ケル慢性炎症ハ女子ニ於テ2例(0.7%)、男子ニ於テハ上顎竇蓄膿症ニ合併セルモノハ1例ヲ認メタルノミ。

其他女子ニ於テ右側全副鼻腔炎ノ1例ヲ觀タルモ、蝴蝶竇ノミ單獨ニ侵サレタルモノハ遂ニ之ヲ發見セザリキ。

鼻腔、副鼻腔ヲ通ジテ腫瘍殊ニ惡性腫瘍ノ如キモノハ1例モ之ヲ發見スルコト態ハザリシハ異トスル所ナルガ、更ニ上記30例ノ鼻茸患者ニ於テモ惡性變性等ノ像ヲ呈セルモノハ全ク之ヲ認メラザリシ所ヨリスレバ、老人ノ鼻茸モ特殊ノ刺戟其他ノ要約ノ存セザル限り惡性變性等ヲ來タスハ極メテ稀有ナル事ニ屬スルモノナルベシ。

第 四 章

咽頭科領域所見ノ統計的觀察

老人ニ於テ咽頭腔ヲ觀察スルニ當リ、青壯年者ノ夫レト著シク其趣ヲ異ニスルハ咽頭腔ノ甚ダシク廣潤ナル事ナリ。コハ一般ニワルダイエール氏咽頭環ヲ形成セル淋巴腺樣組織就中口蓋扁桃腺ノ萎縮ニ負フ所大ナル可ク、更ニ此部ノ脂肪減少等モ亦與ツテ力アルモノナル可シ。

口蓋扁桃腺ハ大多數ニ於テ高度ニ縮小シ、深ク扁桃窩底ニ沈下接着シ、舌壓子ヲ以テ通常ノ如キ検査法ヲ行フモ容易ニ其片影ダニ認メ難ク、型ノ如ク反對側口角ヨリ丹念ニ觀察スルコトニヨリ僅ニ其存在ヲ認ムルコトアルニ過ギザル程度ナリ。

更ニ咽頭後壁、側壁粘膜亦萎縮ニ陥リ、爲ニ是等ノ部分ハ多クハ黃白色菲薄トナリ、著シキ場

合=ハ脊椎骨體ノ輪廓ヲ明瞭ニ觀取シ得ラルハ、
=至ル。尙ホ特殊ノ場合トシテ 85 歳ノ女子ニ
於テハ右側内頸動脈ノ搏動ヲ後壁側方ニ著明ニ
觀ラレタルモノアリ。

軟口蓋モ亦萎縮菲薄トナリ。咽頭腔ヲ廣潤ナラ
シムルニ與ツテ力アルモノト考ヘラル。

斯クノ如ク咽頭腔ノ甚ダシク廣潤トナレル結果
ハ咽頭検査法ヲシテ頗ル容易ナラシメ、殊ニ後
鼻鏡検査法ヲ行フニ便ナリ。更ニ喉頭鏡検査法
モ容易ニシテ且ツ鏡ノ大ナルモノヲ用フル方却
ツテ良キヲ以テ一層明瞭ナル像ヲ得ルコト、ナ
ル。

第一節 咽頭ノ炎症性疾患

第一 急性並ニ慢性咽頭炎

咽頭ニ於ケル急性炎ハ鼻腔並ニ喉頭等ト同様
其觀察スル時期ニヨリ頻度ニ可成リノ差異アル
可キハ論ヲ俟タザル所ナルガ、一年ヲ通ジテ檢
査シタル所ニヨレバ第 22 表ノ如シ。

急性並ニ慢性咽頭炎ニ於テハ男女間ニ罹患頻度
ニ關シテ可成リノ相違ヲ認ムルモノニシテ、
急性咽頭炎ハ男子 3 名(1.0%)ニ對シ女子 10 名
(3.7%)ヲ見、慢性咽頭炎ニ於テハ男子ノ 23 名
(7.9%)ニ對シ女子ノ 53 名(19.5%)ヲ示シタ
ル所ヨリ見レバ、急性並ニ慢性炎ニ於テ女子ハ
男子ノ大凡 3 倍ノ罹患率ヲ示スモノニシテ、之
ヲ男女全體的ニ見ル時ハ急性炎ニ於テ 13 名(2.3
)、慢性炎ニ於テ 76 名(13.5%)ノ罹患率ヲ出
シ居ルコト、ナル。

更ニ慢性咽頭炎ニ就キテ觀ルニ、之ヲ單純性、顆
粒性並ニ乾燥性ノ 3 種ニ分類スルコトヲ得(第
23 表參照)。而シテ單純性ノモノ最モ多ク男子
ニ於テ 18 名(男子慢性咽頭炎患者ノ 78.3%)、女
子ニ於テ 32 名(女子慢性咽頭炎患者ノ 60.4%)、

合計 50 名(慢性咽頭炎患者總數ノ 65.8%)ニミ
ラレ、之ニ次グモノハ顆粒性咽頭炎ニシテ男子
4 名(17.4%)、女子 19 名(35.9%)、合計 23 名
(30.3%)。最モ少キハ乾燥性ノモノニシテ男
子 1 名(4.4%)、女子 2 名(3.8%)、合計 3 名(3.9
)ニ觀ラレタルノミ。

茲ニ興味アルハ顆粒性咽頭炎ニシテ、殊ニ女子
ニ於テ男子ノ約 5 倍ニ之ガミラレ、是等ノ患者
ニ於テハ咽頭後壁並ニ側索ニ著明ナル淋巴濾胞
ノ増殖ト輕重種々ナル粘膜ノ發赤、肥厚トガ認
メラレタリ。尙ホ是等患者ニ於テ口蓋扁桃腺等
ノ肥大セルモノハ女子ニ於テ僅ニ 1 名輕度ナル
モノヲミタルノミ。

乾燥性咽頭炎ノ患者ヲ觀ルニ 3 名共鼻中隔彎曲
症ハ認メラレタレ共鼻腔、喉頭、氣管粘膜等ニ
同様ノ病變ノ認メラレタルモノハ 1 例モアラザ
リキ。

第二 特殊性疾患

咽頭ニ於ケル急性傳染性疾患ハ男女ヲ通ジ 1
例モ遭遇セザリキ。

慢性特殊性疾患トシテ認メラレタルハ微毒性病
變ニシテ男子 5 例(1.7%)、女子 2 例(0.8%)、
合計 7 例(1.3%)ヲミタリ。而シテ是等ノ病變
ハ主トシテ軟口蓋、口蓋弓、咽頭後壁ニ存シ、
既ニ其大多數ハ癰痕形成ヲ以テ治癒シ、口蓋弓
ニ於ケルモノハ後壁トノ間ニ廣キ癒着ヲ來タセ
ルモノアリテ僅ニ鼻咽腔ト相通ジタリ。唯 80 歳
ノ男子 1 例ニ於テハ鼻腔並ニ喉頭ノ護膜重性浸
潤破壊ト共ニ咽頭ニ於テモ鼻咽腔側壁ヨリ天蓋
ニ亘リ黃綠色、有臭性ノ苔ヲ被ムレルモノアリ
キ。

尙ホ結核性病變ハ 1 例モ遭遇ヘズ。

第二節 扁桃腺

第一 常態並ニ肥大症

扁桃腺ハ一般ニハ先ニモ記セル如ク高度ニ萎縮セルモノニシテ、殊ニ咽頭扁桃腺ノ如キハ大多數ニ於テ前、後鼻鏡検査上全ク其片影ダニ認ムルコトヲ得ザルモノナリ。唯口蓋扁桃腺ニ於テハ男子2例(0.7%)、女子4例(1.5%)、合計6例(1.1%)ニ於テ軽度ニ肥大セルモノヲ認メタリ。而シテ男子ニ觀ラレタル肥大ハ共ニ左側ノミニシテ、其中ノ1例ハ75歳ニシテ軽度ニ肥大セル扁桃腺上ニ更ニ「レンズ」豆大ノ扁桃腺ガ細短ナル莖ヲ以テ連ナリ。所謂振子様扁桃腺ノ像ヲ呈シ、自覺的ニハ何等ノ障碍ヲモナサバリシモノナリ。

舌根扁桃腺モ通常ハ頗ル高度ニ萎縮シ、舌根部ニハ屢々多數血管ノ怒張セルヲ目撃ス。而シテ被檢者ノ中男子1例(0.3%)、女子4例(1.5%)、合計5例(0.9%)ニ於テ肥大セルモノヲ認メ、中2例ニ於テ多少ノ異物感アルヲ訴ヘタリ。

第三節 咽頭ノ腫瘍、其他ノ異常

(1) 口蓋扁桃腺表層部並ニ其附近ニ黃白色脂肪様物質ヲ内容トセル小腫瘍ヲミルコトハ青壯年者ニ於テモサシテ珍シキコトニハ非ザルガ余モ検査ニ際シテ男子2例(0.7%)、女子2例(0.8%)、合計4例(0.7%)ニ斯クノ如キモノヲ認メタリ。即チ70歳ノ男子ニ1例右側口蓋扁桃腺ト後口蓋弓トノ間ニ小豆大ノ黃白色、表面滑澤ナル小腫瘍狀ヲナセルモノ及ビ78歳ノ男子ニ1例舌根部ニ大豆大ノ同様所見ヲ呈セル腫瘍ヲ觀、70歳ノ女子ニ於テ左右ノ口蓋扁桃腺ト後口蓋弓トノ間ニ小豆大ノ同様物ヲ見、71歳ノ女子ニ於テ左側ノ後口蓋弓前面ニ米粒大ノ同様ナルモノヲ觀タリ。是等ハ臨牀的ニ何レモ小ナル囊腫ニシテ其内容ガ黃白色脂肪様物質ナルモノ

ニシテ、自覺的ニハ未ダ何等ノ症狀ヲ呈シ居ラザルモノナリ。

更ニ79歳ノ男子ニ於テ舌根部ノ左側ニ小指頭大ノ表面平滑ナル淡紅色、幾分青味がカレル腫瘍アリ。消息子ヲ以テ觸ルハニ柔軟ニシテ液狀ノ内容ヲ有シ、廣基底ヲ以テ發生セルモノナルヲ知ル。即チ舌根囊腫ナリ。而シテ斯クノ如キモノ、存在スルニ拘ハラズ患者ハ自覺的ニ何等ノ苦痛ヲモ訴ヘ居ラズ。

(2) 二裂性懸壅垂。76歳ノ男子ニ於テ1cm以上ニ達スル細長キ懸壅垂ノ真中ヨリ根部迄2分セラレタルモノ、1例(0.2%)ヲ認メタリ。懸壅垂披裂ハ幼若年者ニ多ク、青壯年者ニハ減少スト稱セラル。加納、小松ノ統計ニヨレバ5.2%ヲ示シ、根尾ハ約2%ト記載シ、ケルネルハ白人ニ於テ15.4%、原田ハ函館市小學兒童ニテ9.6%、「アイヌ」人ニテ19.9%ノ高率ヲ記載セリ。而シテ何レモ高年者ニハ殆ンドナシトセルガ、余ノ場合ニ於テモ僅ニ1例ヲ見タルノミナリ。

附 口腔疾患

(1) 「アフタ」。女子2例(0.8%)ニ於テ頬部粘膜上ニ「アフタ」性潰瘍ヲ認メタリ。

(2) 急性表在性舌炎。76歳ノ女子ニ於テ舌粘膜ノ廣汎性ニ發赤腫脹シ、自覺的ニハ激烈ナル疼痛ヲ訴ヘタルモノナリ。

(3) 舌乳嘴腫。80歳ノ男子ニ於テ舌背正中線上ニ「レンズ」豆大ニシテ表面小顆粒狀ヲ呈シ、淡紅白色ニシテ細短ナル莖ヲ以テ基底ニ連ナレル腫瘍アリ。硬度硬ニシテ何等疼痛其他ノ症狀ナク、一見シテ乳嘴腫ナルヲ知ル。

第五章

喉頭科領域所見ノ統計的觀察

高年者ニ於テハ顎下部並ニ前側頸部ノ脂肪組織ノ減少及ビ喉頭諸軟骨ノ硬化等ニヨリ、喉頭ハ視診上其造構ハ頗ル明瞭ニ觀取スルコトヲ得。即チ甲狀軟骨等ノ如キハ恰モ解剖標本ヲ見ルガ如ク其輪廓ヲ明カニ見得ルニ至ルモノアリ。此事ハ殊ニ男子ニ於テ著明ナリ。

喉頭鏡検査ニヨリテ内腔ヲ觀ルニ、粘膜ハ一般ニ萎縮シテ菲薄トナリ淡黄白色ヲ呈シ、會厭披裂軟骨ハ細長トナリテ著明ニ隆起シ、披裂軟骨ハ薄キ「ヴェール」ヲ被リタル如ク其形ヲ透見シ得ラントスルガ如シ。聲帶ハ假聲帶ガ淡紅黄色トナリテ萎縮セル爲ニ青壯年者ノ夫レニ比シテ著シク其幅ト見掛上ノ長サヲ増シタルガ如ク見ユ。更ニ聲門下ヨリ氣管腔ヲモ十分ニ窺フコトヲ得ルモノ多キガ、氣管粘膜ハ頗ル菲薄トナリテ灰白黄色ヲ呈シ、個々ノ氣管軟骨輪ヲ頗ル明カニ見ルコトヲ得。

尙ホ喉頭鏡検査ニ當リ、會厭軟骨ノ種々ナル程度ノ「オメガ」型ヲ呈セルモノヲ可成り屢々見タルガ、其頻度ハ男子30名(10.3%)、女子11名(4.1%)、合計41名(7.3%)ニ當レリ。斯ク多數ノ「オメガ」型會厭軟骨ヲ觀ルハ Edmund, Mayer 等ノ喉頭軟骨硬化説ニ從ツテ見ルトキ即チ會厭軟骨基質ノ收縮並ニ結締織性變性及ビ軟骨細胞ノ脂肪變性等ニヨリテ會厭軟骨游離縁ハ其彈力性ヲ減ジ内方ニ向ツテ翻轉スルニ至ルガ、正中線ニ於テハ中舌會厭靱帶ノ牽引ノ爲ニ此部ハ常ニ舌根部ニ近ク保タル、爲メ遂ニ「オメガ」型ヲ呈スルニ至ルモノナランカト思惟セラル。

1) 男子ニ於テ女子ニ於ケルヨリモ遙カ多數ニ

見ラレタルハ、會厭軟骨硬化過程ガ男女ニヨリテ異ル所アルヨリ來ルモノナル可ク、更ニ會厭軟骨游離縁ノ内方ニ翻轉スルハ、其硬化過程ガ後方ヨリ前方ニ進ムトイフ Duverney ノ説ニヨリテ了解シ得ラル、所ナラン。

第一節 喉頭ノ炎症性疾患

第一 急性並ニ慢性喉頭炎

四季ヲ通ジテ觀タル急性並ニ慢性喉頭炎ハ第24表ノ如ク、急性炎ハ男子ニ於テハ1例ニモ遭遇セズ、女子ニ於テ僅ニ2名(0.8%)ヲ見タルノミ。慢性炎モ亦男女各1名ヲ見タルノミニシテ、單純性ノ急性並ニ慢性炎ハ頗ル少數ナリ。今之ヲ急性並ニ慢性咽頭炎ノ比較的多數ニ、殊ニ女子ニ於テ屢々觀ラル、所ヨリスレバ、老人ニ於テ屢々目撃セラル、所ノ喘鳴、喀痰等ノ原因的役割ニ對シテハ、喉頭ハ餘リ大ナル役目ヲナシ居ルモノニ非ズシテ、氣道ニ於テ喉頭ニ上下ヨリ接續スル咽頭並ニ氣管、氣管枝ノ如キ部ガ主役ヲ爲スモノ、如ク考ヘラル。

第二 假聲帶肥大症

喉頭ニ特別ノ炎症變化ヲ示サズ、然モ他ノ部ニ於テハ通常ノ如ク組織ノ萎縮狀態ヲ認ムルトキ、獨リ假聲帶ニ於テノミ其肥厚ヲ目撃スルコトアリ。即チ男子ニ於テ5例(1.7%)(中左側ノミノモノ3例、右側ノミノモノ1例、兩側ノモノ1例)、女子ニ於テ6例(2.2%)(左側ノミノモノ4例、右側ノミノモノ無シ、兩側ノモノ2例)合計11例(2.0%)(中左側ノミノモノ7例、右側ノミノモノ1例、兩側ノモノ3例)ニ之ヲ認メタリ。之ガ原因ニ關シテハ未ダ明瞭ナラズ、今後ノ研索ニ俟タザル可カラズ。

第三 特殊性疾患

喉頭ニ於テモ咽頭ニ於ケルト同ジク急性傳染

性疾患ハ之ヲ觀ルコト無カリキ。

慢性特殊疾患ノ中結核性ノモノハ1例モ認メザリシガ、微毒性病變ハ男子ニ於テ2例(0.7%)、女子ニ於テ2例(0.8%)、合計4例(0.7%)ヲ認メ、是等ハ何レモ咽頭或ハ鼻腔ニ於ケル同種病變ト共ニ存シ、現在ハ癰痕形成ニヨリテ痕跡ヲ殘シ居ルモノナリ。

第二節 喉頭ノ腫瘍

良性腫瘍トシテ認メラレタルモノハ唯1種即チ囊腫ノミナリ(第24表参照)。

喉頭囊腫ハサシテ珍シキモノニハ非ザル可ケレド、然モ聲帶「ボリーブ」、乳嚢腫ノ如ク屢々遭遇スルモノニモ非ザルガ如シ。然ルニ高齢者ニ於テハ之ガ比較的多數ニ存在スルモノ、如ク、即チ男子ニ於テ10例(3.4%)、女子ニ於テ2例(0.8%)、合計12例(2.1%)ニ認メタリ。其存在セル場所ハ全部會厭軟骨ノ舌面、然モ其中10例迄ハ舌會厭窩ニ近キ部ニアリ、1例ハ其游離縁ニ近ク存シ、他ノ1例ハ其中間部ニ存シタリ。大サハ小豆大ヨリ鳩卵大ニ至ルモノニシテ12例ノ中10例迄ハ單獨ニ存シ、1例ハ大豆大ノモノト小豆大ノモノトガ極ク接近シテ存在シ、他ノ1例ハ示指頭大ノ主腫瘍ノ附近ニ更ニ4個ノ小小豆大ヨリ米粒大ノモノ散在セリ。腫瘍ノ形ハ最も多ク橢圓球狀ヲ呈シ少數ニ於テ眞球狀ヲナセルモノアリ、孰レモ廣基底ヲ以テ基礎組織ヨリ發生シ、細莖ヲ有シタルモノハ認メザリキ。其表面ハ平滑ニシテ大多數ハ全體的ニ黃白色ヲ呈シ、時ニ多少ノ紅味ヲ帶ビタルモノアリ、唯2例ニ於テハ小指頭大ノ腫瘍ノ凡ソ半分ハ黃白色脂肪様ノ内容ヲ示シ他ノ半分ニ於テハ青味が、レル灰白紅色乃至淡紅色ヲ呈シ液體様ノ内容ヲ透見シ得ラル、ガ如キモノアリ。尙

ホ大豆大以上ノモノニアリテハ其表面ニ側方ヨリ長軸(前頭平面上ニアリ)ニ沿フテ1本乃至數本ノ美麗ナル血管ガ樹枝狀ニ走レルヲ見ル。觸診スルニ硬度ハ多クハ捏粉様柔軟ニシテ大ナルモノニアリテハ消息子ヲ以テ之ヲ押ス時ハ其部ニ壓窩ヲ生ジ、又2例ニ於テハ波動ヲ觸ル、コトヲ得タリ。年齢的ニ之ヲ見ル時ハ64歳、67歳、68歳(♀)、69歳(2名)、70歳、72歳、74歳、75歳、78歳(♀)、79歳、86歳等ニシテ殆ンドスベテノ年代ニ亘レルヲ見ル。而シテ自覺的ニ症狀ヲ現ハシタルハ大豆大以上ノ7例ニシテ孰レモ喉頭部ニ異物感アリ、唯1例女子ノ鳩卵大ノモノニアリテハ嚥下障礙並ニ呼吸障礙ヲ訴ヘタリ。他ノ小ナル5例ニ於テハ自覺的ニ何等ノ症狀ヲモ呈セズ、患者自身ハ其存在ニ全然氣付カズ、検査ニ際シ偶然發見セラレタルモノナリ。

囊腫ニ關スル從來ノ記載ヲ見ルニ、發生年齡ハ中年以後ノ者ニ多ク、男子ハ女子ニ比シテ頻度大ナリ(Salomon)トセラレ、發生個所ハ會厭軟骨殊ニ其舌面ニ多シト。余ノ症例ニ於テモ年齢ハ上記ノ如ク、又男性10例ニ對シ女性2例ニシテ男子ハ女子ニ比シ壓倒的ニ大ナル頻度ヲ示セルハ注目スベキ事柄ナリ。尙ホ發生個所ハ著者ノ症例ハ孰レモ會厭軟骨ノ舌面然モ舌會厭窩ニ近キ部ニアリテ孰レモ廣基底ヲ有シ居タリ。

喉頭囊腫發生ニ關シテハ先天性、潑溜性、外傷性、淋巴性等種々ナル原因ヲ考慮セラル、所ナルガ、會厭軟骨舌面ニ於テハ其舌會厭窩ニ近キ部ニ於テ粘液腺ノ大ナルモノガ多數ニ存在シ、然モ其ノ排泄口ハ通常軟骨間隙ヲ通リテ喉頭面ニ開口スルトイフ解剖學的所見並ニ會厭軟骨ニ

於ケル老人性變化トシテ所々ニ軟骨基質ノ收縮、纖維ノ増加、軟骨膜下ニ於ケル彈力纖維ノ消失等ヨリ軟骨ハ著シク不撓性トナリ、從ツテ毀損セラレ易クナル等ノ所見ノ見ラル、所ヨリスレバ、是等囊腫ノ多クハ恐ラク老人性變化ノ進行スルニ際シ、何等カノ原因ニヨリテ其排泄口ガ閉塞セラレ、分泌物ノ滯溜スルニヨリテ生ジタル所謂潯溜性囊腫ニ非ズヤト思考セラル。

惡性腫瘍トシテハ80歳ノ男子ニ於テ癌腫ノ唯1例ヲ見タルノミ。本患者ハ3・4年前ヨリ嘔聲アリシガ其儘放置セシニ半年位前ヨリ殆ンド無聲トナリ、漸次呼吸障礙ヲ來タシタルモノニシテ、診察セル際ニハ喉頭内腔ハ其右側ヨリ大半ヲ拇指頭大ノ腫瘍ヲ以テ充タサレ、此腫瘍ハ右側假聲帶ヨリ出デタルモノ、如ク、發聲ニ際シ右聲帶後半部ノ運動ヲ僅カニ見ル事ヲ得、左側ハ聲帶、假聲帶共ニ肉眼的ニ殆ンド變化ヲ認メザル有様ナリ。腫瘍ハ橢圓球形ニシテ表面比較的平滑、潰瘍等ヲ認メズ、觸診スルニ硬度硬ク、周圍トノ癒着割合ニ少ク可成リノ可動性ヲ有シ、色ハ灰白色ヲ呈ス。

耳鼻咽喉科領域ニ於テ惡性腫瘍ヲ觀ルコトハ左程珍ラシキモノニモ非ザル可キガ、余ノ検査ニ際シテハ僅ニ喉頭ニ於テ唯1例ノ癌腫ヲ見タルノミナリ。コハ検査人員ノ少數ナルニヨル所ナランカトモ考ヘラルレ共、然モ同ジク浴風園ニ於テ胃癌、子宮癌、食道癌等ノ比較的多數(胃癌ハ收容者ノ5.3%、食道癌ハ0.6%)ニ見ラル、點ヨリスレバ、我ガ科領域ニ於ケル惡性腫瘍ハ其ノ年齡的關係ヨリ60歳以前ニ發シ、既ニ60歳以上ニ達セズシテ他界スル者多キニ依ルニ非ズヤトモ考ヘラル、次第ナリ。

第三節 其他ノ病變

喉頭ノ神經性障礙トシテ見ラレタルモノニ迴歸神經麻痺並ニ後筋麻痺ノ各1例アリ。前者ハ71歳ノ男子ニシテ左側迴歸神經ニ麻痺アリ、左側聲帶ハ屍體位ヲトリ、發聲時ニハ右側聲帶ハ正中線ヲ越エテ左側ニ及ビ所謂代償機能ヲ現ハシ居ルヲ以テ嘔聲殆ンドナシ。他ノ1例ハ75歳ノ男子ニ於テ兩側後筋麻痺ヲ有シ、發聲時並ニ呼吸時ニ於テ共ニ兩側聲帶ハ正中位ニ固定シ、吸氣時ニモ極ク狹キ聲門ノ存スルノミナルヲ以テ、輕微ナル喉頭加答兒ニ際シテモ常ニ著明ナル呼吸困難ヲ來タシ居ルモノナリ。而シテ此兩者共ニ其麻痺發現ノ初期ニ於テ幾度カ診察ヲ受ケタルモ遂ニ其原因ハ不明ナリシモノナリ。次ニ75歳ノ男子ニ於テ所謂氣管橫隔膜ヲ見タリ。即チ聲門下ニテ之ト餘リ隔タラザル高サニ於テ管腔ノ右半部ニ展張セル結締織性膜アリ、灰白色ヲ呈シ菲薄ニシテ表面平滑、自覺的ニ何等ノ症狀ヲモ呈シ居ラザルモノニシテ検査ニ際シ偶然發見セラレタルモノナリ。

第六章

總括

以上記載セル所ノモノヲ總括スルニ凡ソ次ノ如シ。

第一 被檢者

被檢者ハ總數562名(男子290名、女子272名)ニシテ年齡ハ60歳以上101歳ノモノナリ。

第二 耳科領域所見

1. 耳翼ノ長徑、横徑ハ一般ニ青壯年者ノ夫レニ比シ著明ニ大ニシテ、男女213名ニ就キ計測セル結果、長徑ハ男子62—84mm、女子58—86mm、平均男子右側73.4mm、左側72.6mm、

女子右側 72.9mm, 左側 70.4mm。幅徑ハ男子 26—43mm, 女子 29—42.5mm, 平均男子右側 34.6mm, 左側 33.6mm。女子右側 36.5mm, 左側 35.2mm ニシテ即チ長徑ハ男子ハ女子ヨリ優レタルモ幅徑ハ女子ノ方勝レタリ。尙ホ同一人ニ於テモ左右ニ於テ其ノ大サハ異ルモノ多ク。右側ハ左側ニ比シ一般ニ大ナリ。更ニ男女共年齢ノ進ムニ從ヒ長徑、幅徑共ニ其平均值ノ増大スルヲ認ム。

是等ノ結果ヲシュワルベノ獨逸ニ於ケル統計ニ比スルニ、平均長徑ニ於テハ男、女子共ニ我ガ老人ノ方明カニ大ニシテ、幅徑ハ男子ハ彼ニ及バザルモ女子ハ大體同様ナル數値ヲ示ス。

2. 耳翼ノ諸種畸形中見ラレタルモノハ先天性耳瘻孔 9 名 (1.6%)、過剰耳 2 名 (0.7%)、腫瘍トシテハ女子ニ黃色腫 3 名 (1.1%)、男子ニ「アテローム」 3 例 (1.0%) ヲ認メタリ。尙ホ耳血腫癰痕ヲ男子ニ 2 例 (0.7%)、耳翼上半部ノ外傷性缺損ヲ男女ニ各 1 例見タリ。

3. 耳聾性塞ハ耳鏡検査ニ當リ最モ屢ニ遭遇セルモノニシテ、男女ヲ通ジ 60 歳代ニテ平均 26.3%、70 歳代ニテ 22.4%、80 歳代ニテ 31.8%、90 歳以上ニテ 33.3%、被檢者全般トシテ見ル時 25.3%ノ多數ニ之ヲ認メ、コハ又全耳疾患ノ 38.4%ニ當ル。而シテ此成績ハ先人諸氏ノ小學兒童ニ於ケル統計中ニテモ多數ナル方ニ匹敵シ、壯丁ニ於ケルモノヨリ遙ニ多ク、即チ耳聾性塞ハ小兒ト老人トニ多シトセラル、コトニ一致ス。

4. 外聽道異物ハ男子 2 例 (0.7%)、女子 2 例 (0.8%)、合計 4 例 (0.7%) ニ發見シ、其種類ハ草ノ實、蠅ノ死骸、新聞紙片、紙裂縫等ニシテ中 3 例ハ異物ノ存在ヲ自覺セザリシモノ、1 例

ハ聽覺過敏ノ爲メ兩側外聽道ニ新聞紙片ヲ挿入シ居タルモノナリ。

5. 外聽道ノ炎症性疾患トシテ見ラレタルハ急性限局性炎 8 例 (1.4%)、慢性彌蔓性炎 5 例 (0.9%) ナリ。而シテ慢性炎ノ中男子 1 例、女子 2 例ニ於テハ外聽道骨壁ノ破壊ヲ來タシ汚穢分泌物中ニ多數ノ小骨壞疽片ヲ發見セリ。是等ハ恐ラク微毒性病變ニヨルモノナルベシ。

6. 鼓膜ハ高齢トナルニ從ヒ漸次濁濁ヲ來タスモノ多シ。而シテ其最初ニ發現スル部位ハ前下部邊緣部、鼓膜中心部及ビ後上部等ニシテ、是等ノ濁濁ハ漸次鼓膜全般ニ及ブモノ多シ。從ツテ反射光錐ノ消失セルモノハ 60 歳代 42.8%、70 歳代 51.3%、80 歳代 56.8%、90 歳以上 100.0%ノ成績ヲ示ス。

尙ホ高齢者ニ於テハ鼓膜ノ後半部ハ前半部ニ比シ一般ニ見掛上著シク小ナルモノ多シ。更ニ老人ノ高血壓者ニ於テ屢ニ鼓膜ノ後上部ヨリ外聽道後上部ニ亙リテ小出血點ヲ認ムルコトアリ、即チ是等出血點ハ鼻出血等ト共ニ或ハ高血壓ノ指標トナル可キモノナラン。

7. 歐氏管狹窄、中耳ノ諸疾患中最モ多ク認メラレ、男子 58 名 (20.0%)、女子 68 名 (25.0%)、合計 126 名 (22.4%) ノ多キニ達シタリ。而シテ女性ハ男性ヨリ少シク高キ頻度ヲ示シ、一側ノミノモノ 62.0%ニシテ兩側ノモノハ 38.1%ヨリモ遙ニ多ク、右側ノミノモノ (40.6%) ハ左側ノミノモノ (21.4%) ニ比シ約 2 倍ノ頻度ヲ示ス。尙ホ中耳諸疾患ノ 67.0%ヲ占メ、全耳疾患ノ 34.1%ニ當レルヲ以テ、是等ノ成績ハ青壯年者ノ頻度ニ比シ決シテ少キモノニ非ズ。即チ本症ハ老人ニ於テモ可成リ多數ニ存在シ、難聴、耳鳴等ノ重要ナル一原因ヲナスモノト思惟セラ

ル。

8. 急性化膿性中耳炎ハ7名(1.2%)＝見ラレタルガ、其経過＝ハ特ニ記載ス可キ程ノコトナシ。

慢性化膿性中耳炎ハ12名(2.1%)＝見ラレ何レモ中心性穿孔ヲ有スルモノ、ミニシテ是亦特記ス可キ程ノコトナシ。

中耳炎殘貽症ハ歐氏管狹窄ニ次イデ多數＝見ラレタル病變ニシテ中耳諸疾患ノ20.7%ヲ占メ、總數39名(6.9%)ニシテ此中37耳ニ於テハ鼓膜ニ穿孔ノ痕痕性閉塞ヲナセルモノヲ認メ、2耳ハ永續性穿孔ノミヲ、他ノ2耳ニ於テハ石灰沈着ノミヲ認メタリ。

9. 急性乳嚢突起炎ハ68歳、72歳ノ男子2名及ビ67歳、71歳ノ女子2名、合計4名(0.7%)＝見ラレ、何レモ局所麻醉ノ下ニ乳嚢突起鑿開術ヲ行ヒシガ、術後ノ経過ハ頗ル良好ニシテ何レモ好結果ヲ得タリ。

10. 老人性難聴。高齢トナルニ從ヒ聽力ハ漸次減退スルモノニシテ、自覺的ニ難聴ヲ訴ヘタルモノヲ見ルニ60歳代25.8%、70歳代40.1%、80歳代63.6%、90歳以上ハ100%ノ成績ヲ示シタリ。即チ男女共ニ年代ノ進ムニ從ヒ難聴者ハ著明ナル増加率ヲ以テ増加シ、尙ホ女子ハ男子ヨリ多數ニ難聴ヲ訴フル者アルヲ認メタリ。

11. 高齢者ノ多數＝見ラルハ耳鳴ハ其性質概シテ高調持續性ナルモノ多ク、其發現ハ自覺的ニ難聴ヲ訴フル以前或ハ遅クモ夫レト殆ンド同時ナルモノ多シ。年齢別ニ之ヲ見ルトキハ60歳前後ヨリ現ハルハモノ多ク、斯ノ如キ耳鳴ハ2—3乃至4—5年持續シテ再ビ消失スルモノ多シ。斯カル者ハ其時代ニ至レバ難聴ハ可成リノ度迄進行シ居ルモノ多シ。然レ共又一方ニハ

長年月耳鳴ノ持續シ、其割合ニ難聴ノ進行セザルモノモ認メラル。

第三 鼻科領域所見

1. 外鼻ニ於ケル先天性畸形ハ之ヲ認メズ。

後天性畸形トシテ72歳ノ男子ニ微毒性鞍鼻並ニ鼻翼部ノ大缺損及ビ溝狀瘢痕ヲ、又75歳ノ男子ニ於テ狼瘡性瘢痕ノ爲メ鼻入口部ノ著シク狹小トナレルモノ、更ニ70歳ノ男子ニ於テ痘瘡性瘢痕ノ爲メ兩側鼻入口部ノ殆ンド全ク閉塞セラレタルヲ認メタリ。女子ニ於テハ畸形ト稱ス可キ程ノモノヲ認メズ。

尙ホ81歳ノ男子ニ於テ左側キーゼルバッフ氏部位ニ小小豆大ノ良性腫瘤ヲ認メタリ。

2. 健常ナル高齢者ニアリテハ鼻腔粘膜ハ蒼白色或ハ之ニ多少ノ赤色調ヲ帶ビ、一般ニ菲薄トナリ殊ニ甲介粘膜ニ於テ之ガ稍々著明ニ現ハレ、爲ニ上、中、下各鼻道殊ニ中鼻道並ニ總鼻道ハ廣濶トナリ、上顎竇口ノ如キハ比較的容易ニ窺ヒ得ラルハニ至リ、更ニ鼻咽腔後壁、天蓋、歐氏管隆起等モ可成リ明瞭ニ目撃セラルハモノ多シ。尙ホ嗅披裂モ一般ニ廣ク開放ス。

3. 鼻中隔ノ形態異常。鼻腔検査ニ當リ最モ屢々遭遇セルハ鼻中隔ノ形態異常ニシテ、男女共ニ彎曲症ヲ第一トシ、櫛、棘之ニ次グ。即チ純粹ナル彎曲症ハ男子155名(53.4%)、女子86名(31.6%)、合計241名(42.9%)。彎曲症ニ櫛ヲ合併セルモノハ男子83名(11.3%)、女子34名(12.5%)、合計67名(11.9%)ニシテ此兩者ヲ合スレバ男子188名(64.7%)、女子120名(44.1%)、合計308名(54.8%)トナリ全被檢者ノ半数以上ニ達ス。

中隔櫛ヲ有スルモノ、中單ニ一側ノミノモノハ男子25名(8.6%)、女子36名(13.2%)、合計61

名(10.9%)。兩側ノモノハ男子15名(5.2%)、女子42名(15.4%)。合計57名(10.1%)。此兩者ヲ合スレバ橈ヲ有スルモノハ男子40名(13.8%)、女子78名(28.6%)。合計118名(21.0%)トナリ全被檢者ノ約2割ヲ占ム。

中隔棘ヲ有スルモノハ男子2名(0.7%)、女子3名(1.1%)。合計5名(0.9%)ノ少數ニ過ギズ。以上ノ諸種異常ヲ合スレバ男子ハ230名(79.3%)、女子ハ201名(73.9%)。合計431名(76.9%)トナリ、即チ全被檢者ノ $\frac{3}{4}$ 以上ハ形態異常ヲ有ス。

而シテ彎曲症ハ男子ニ於テ女子ヨリ遙ニ多數ナレドモ、橈ハ女子ニ於テ男子ノ凡ソ2倍ヲ占メ、棘ハ大差ヲ認メズ。更ニ彎曲症ニ於テ左彎ハ右彎ノ凡ソ1.6倍ニ當リ、橈ニ於テモ左側ニ存スルモノハ右側ノモノ、凡ソ1.5倍ヲ占ム。又彎曲ノ種類ハ大部分ハC字型ニシテ其96.8%ヲ占メ、S字型ハ僅ニ3.2%ニ過ギズ。

之ヲ要スルニ高齢者ニ於ケル中隔形態異常ノ頻度ハ内外文献ニ見ラル、頻度ノ凡ソ中位ニ相當シ、即チ高齢者ニ於テモ成人ノモノト大差ナキコトヲ知ル。

4. 鼻中隔ノ特殊性炎症トシテ男子3例ニ繼毒性疾患ヲ、男子1例ニ狼瘡性疾患ヲ認メタリ。而シテ前者ノ中1例ハ既ニ癰痕治癒ヲナセルモ2例ハ尙ホ炎症性病變ヲ見ル。後者ハ鼻入口部ヨリ蔓延セルモノナリ。

5. 鼻中隔ニ於テ原因不詳ノ穿孔ヲ男子1名(0.4%)、女子5名(1.8%)、合計6名(1.1%)ニ認メタリ。是等ノ穿孔ハ孰レモ中隔ノ前下部即チ軟骨部ニ存シ圓形或ハ橢圓形ヲナシ、邊緣圓滑清淨ニシテ粘膜ニテ被ハル。是等ハ所謂特發性鼻中隔穿孔ト稱ス可キモノナランカトモ考ヘ

ラレ。又一方是等ヲ有スル者ハ孰レモ幼時天然痘ニ罹患セルモノ、ミナルヲ以テ或ハ痘瘡トモ何等カノ關係アルニ非ズヤトモ考ヘラル。

6. 鼻腔内癒着症ヲ男子1例ニ認メ、更ニ中隔結節ヲ男子4例(1.4%)、女子1例(0.4%)、合計5例(0.9%)ニ認メタリ。

7. 急性並ニ慢性鼻炎。

(1) 慢性肥厚性鼻炎。各種鼻炎ノ中最モ多ク男子85名(29.3%)、女子98名(36.0%)、合計183名(32.6%)ニ見ラレ。兩側ニ病變アルモノト片側ノモノト相半ス。左右ヲ比較スルニ右側ニ病變ノアルモノハ左側ニアルモノヨリ遙ニ多數ナルガ、コハ主トシテ鼻中隔彎曲症ノ存スルモノニ於テ左彎ハ右彎ヨリ遙ニ多數ナルニヨルモノト考ヘラル。更ニ肥厚部ヲ見ルニ中・下甲介共ニ肥厚セルモノト中甲介ノミ肥厚セルモノトハ其數相半バス。

(2) 慢性單純性鼻炎。前者ニ次イデ多ク見ラレ男子28名(9.7%)、女子34名(12.5%)、合計62名(11.0%)ニ上レリ。

(3) 急性鼻炎。四季ヲ通ジテ見ルニ男子10名(3.4%)、女子12名(4.4%)、合計22名(3.9%)ニ認メラレタリ。

(4) 慢性萎縮性鼻炎。高齢者ニ於テ鼻腔ニ著明ナル萎縮像ヲ呈スルハ多クハ70歳以後ニシテ60歳代ニテハ未ダ少ク、且ツ萎縮ハ最初ハ多クハ下甲介ニアラハレ次イデ中・上甲介其他ノ部位ニ及ブモノ、如シ。而シテ余ノ検査ニ際シ特ニ上記ノ如キ病名ヲ附スベキモノハ男子9名(3.1%)、女子10名(3.7%)、合計19名(3.4%)ノ少數ニ過ギズ。

8. 眞正臭鼻症。78歳、83歳ノ女子2名(0.7%)ニ認メタリ。即チ前者ハ成年期ヨリ結痂。

惡臭アリ。現在ハ惡臭ハ全クナク結痂モ殆ンド消失シテ自覺的ニ殆ンド全快セルモノ。後者ハ現在ニ於テモ結痂、惡臭、中等度ノ萎縮アリテ症狀依然不變ナルモノナリ。

9. 粘液鼻茸。男子20例(6.9%)、女子10例(3.7%)、合計30例(5.3%)ニ認メラレ。是等ノ大部ハ中鼻道ノ前部及ビ中部側壁ヨリ發生シテ定型の外観ヲ呈シ、惡性變性等ノ像ヲ示シタルモノナシ。尙ホ男子ハ女子ノ大凡2倍ノ頻度ニ當ル。

10. 副鼻腔蓄膿症。諸種副鼻腔ノ蓄膿症患者ハ男子17名(5.9%)、女子21名(7.7%)、合計38名(6.8%)ニシテ、之ヲ各副鼻腔ニ就イテミルニ。

(1) 上顎竇。男子13名(4.5%)、女子14名(5.1%)、合計27名(4.8%)ニシテ全蓄膿症患者ノ71.1%ヲ占ム。

(2) 前額竇。男子4例(1.3%)、女子4例(1.5%)、合計8例(1.4%)ニシテ全蓄膿症患者ノ21.1%ニ當ル。

(3) 篩骨蜂窠。男子ニ於テハ上顎竇炎ニ合併セルモノ1例(0.3%)、女子2例(0.7%)、合計3例(0.5%)ニシテ全蓄膿症患者ノ7.9%ニ當ル。

(4) 蝴蝶竇。單獨ニ侵サレタルモノナク、唯女子1例ニ於テ右側全副鼻腔炎ヲ認メタルノミ。

11. 鼻腔、副鼻腔ヲ通ジ腫瘍殊ニ惡性腫瘍ハ1例モ發見セザリキ。

第4 咽頭科領域所見

1. 高齢者ノ咽頭腔ハ甚ダシク廣濶ナリ。コハ一般ニワルダイエル氏咽頭環就中口蓋扁桃腺ノ萎縮ニ負フ所大ナルベク、更ニ軟口蓋、咽頭

後壁、側壁粘膜ノ萎縮菲薄モ與ツテ力アルモノト考ヘラル。

是等ノ結果咽頭検査法ハ頗ル容易トナリ、殊ニ後鼻鏡検査法ニ於テ然リ。更ニ喉頭鏡検査法ニ於テモ鏡ノ大ナルモノヲ用フル方便ナル場合多ク、從ツテヨリ明瞭ナル像ヲ觀取シ得ラル、コト多シ。

2. 急性並ニ慢性咽頭炎。急性炎ハ男子3名(1.0%)、女子10名(3.7%)、合計13名(2.3%)ニ見ラレ。慢性炎ハ男子23名(7.9%)、女子53名(19.5%)、合計76名(13.5%)ニ認メラレタリ。而シテ急性、慢性炎共ニ女子ハ男子ノ大凡3倍ノ罹患率ヲ示ス。

慢性咽頭炎ハ之ヲ單純性、顆粒性、乾燥性ノ3種ニ分類スルコトヲ得。

(1) 單純性咽頭炎。慢性炎中最モ多ク男子18名(男子慢性炎患者ノ78.3%)、女子32名(女子慢性炎患者ノ60.4%)、合計50名(慢性炎患者總數ノ65.8%)ニ見ラレタリ。

(2) 顆粒性咽頭炎。前者ニ次イデ男子4名(17.4%)、女子19名(35.9%)、合計23名(30.3%)ニ認メラレタルガ、女子ニ於テ本疾患ガ殊ニ多ク見ラレタルハ興味アル事ナリ。

(3) 乾燥性咽頭炎。本症ハ3者中最モ少ク男子1名(4.4%)、女子2名(3.8%)、合計3名(3.9%)ニ見ラレタルノミ。而シテ是等ノ病變ハ孰レモ咽頭粘膜ニノミ限局シ居タリ。

2. 特殊性疾患トシテ微毒性病變ヲ男子5例(1.7%)、女子2例(0.8%)、合計7例(1.3%)ニ認メ、是等ノ大多數ハ既ニ癰瘰治癒ヲ營ミ、唯1例ノミ尙ホ活動性ノモノナリキ。

4. 扁桃腺ノ常態並ニ肥大症。

扁桃腺ハ孰レモ高度ニ萎縮シ。口蓋扁桃腺ハ其窩底ニ深く沈下接着セルモノヲ僅ニ認メ得ラルレ共。咽頭扁桃腺ノ如キハ其片影ダニ認メラレザルモノ多シ。舌根扁桃腺モ亦漸ク其存在ヲ認メラルモノ多ク。此部ニハ屢ニ多數血管ノ怒張セルヲ見ル。

口蓋扁桃腺肥大ハ男子2例(0.7%)。女子4例(1.5%)。合計6例(1.1%)ニ見ラレ孰レモ軽度ナルモノニシテ。男子ノ1例ハ所謂振子様扁桃腺ナリキ。

舌根扁桃腺肥大ハ男子1例(0.3%)。女子4例(1.5%)。合計5例(0.9%)ニ認メラレタリ。

5. 口蓋扁桃腺ノ附近表層部並ニ舌根部ニ於テ黃白色脂肪様物質ヲ内容トセル米粒大乃至大豆大ノ嚢腫ヲ男子2例(0.7%)。女子2例(0.8%)。合計4例(0.7%)ニ認メ。更ニ舌根部ニテ液狀ノ内容ヲ有スル小指頭大ノ嚢腫1例ヲ男子ニ見タリ。而シテ是等ノモノハ孰レモ自覺的ニ何等ノ症状ヲ呈シ居ラザリキ。

6. 二裂性懸壅垂ヲ76歳ノ男子ニ1例認メタルガ。從來記載セラレタル如ク高年者ニハ極メテ稀ナルモノハ如シ。

附。口腔疾患

「アフト」性口内炎ヲ女子2例(0.8%)ニ。急性表在性舌炎ヲ76歳ノ女子1例ニ。又舌乳頭腫ヲ80歳ノ男子1例ニ認メタリ。

第五 喉頭科領域所見

1. 喉頭ハ高齢者ニ於テハ視診上其造構ヲ頗ル明瞭ニ觀取セラルモノ多シ。喉頭鏡下ニ之ヲ見ルニ粘膜ハ一般ニ萎縮菲薄トナリ淡黃白色ヲ呈シ。會厭披裂皺襞ハ細長トナリテ著明ニ隆起シ。聲帯ハ見掛上其幅ト長サト増シタル如ク見ユ。更ニ氣管粘膜モ頗ル菲薄トナリ氣管軟

骨輪ヲ著明ニ見ルコトヲ得。

2. 「オメガ」型會厭軟骨。種々ナル程度ノモノヲ男子30名(10.3%)。女子11名(4.1%)。合計41名(7.3%)ニ認メラレタリ。

3. 急性喉頭炎ハ男子ニテハ1例ニモ遭遇セズ。女子ニテ僅カニ2名(0.8%)ヲ見タルノミ。慢性喉頭炎モ亦男女各1例ヲ見タルニ過ギズ。之ヲ咽頭炎ノ頻度ニ比較スルニ其餘リニ少キニ奇異ノ感ヲ抱ケリ。

4. 假聲帶肥大症。男子5例(1.7%)。女子6例(2.2%)。合計11例(2.0%)ニ見ラレ。其中左側ノミノモノ7例。右側ノミノモノ1例。兩側ノモノ3例ニシテ。之ガ原因ハ未ダ明カナラズ。

5. 特殊性疾患トシテ微毒性病變ヲ男子2例(0.7%)。女子2例(0.8%)。合計4例(0.7%)ニ認メタルガ孰レモ瘢痕治癒ヲ營メルモノナリ。其他ノ病變ハ之ヲ認メザリキ。

6. 喉頭腫瘍中良性ノモノトシテ認メラレタルハ嚢腫ノミニシテ男子10例(3.4%)。女子2例(0.8%)。合計12例(2.1%)ナリ。此頻度ハ青壯者ノ夫レニ比シ遙カニ大ナルハ興味アルコトナリ。

惡性腫瘍トシテハ80歳ノ男子ニ唯1例嚢腫ヲ見タルノミ。

7. 喉頭ノ神經性障礙トシテハ71歳ノ男子ニ左側迴歸神經麻痺ヲ。又75歳ノ男子ニ兩側後筋麻痺ヲ認メタリ。

8. 75歳ノ男子ニ於テ聲門下ニ之ト近ク所謂氣管横隔膜ヲ見タリ。

第 1 表 被 検 者

性 別 計	年代別 計 被検者数ノ %	60—69歳	70—79歳	80—89歳	90歳以上	合 計
	被 検 者 数	105	146	38	1	290
男 子	被検男子ニ對 スル 百分比	36.2	50.3	13.1	0.3	
	被 検 者 数	89	131	50	2	272
女 子	被検女子ニ對 スル 百分比	32.7	48.2	13.4	0.7	
	被 検 者 数	194	277	38	3	562
男 女 合 計	總被検者ニ對 スル 百分比	34.5	49.3	15.7	0.5	

第 2 表 耳 翼 ノ 大 サ (其 1 長徑)

性 別	年齢計 平均 被検者 側. 平均	60—69歳	70—79歳	80—89歳	90歳以上	合計. 總平均
	被 検 者	33 名	53 名	12 名	1 名	104 名
男 子	右 側 平 均	71.2mm	74.4mm	74.8mm	81.5mm	73.3mm
	左 側 平 均	71.0mm	73.3mm	73.4mm	79.5mm	72.6mm
	左 右 平 均	71.1mm	73.9mm	74.1mm	80.5mm	72.9mm
	被 検 者	31 名	60 名	17 名	1 名	109 名
女 子	右 側 平 均	71.9mm	72.8mm	74.9mm	76.5mm	72.9mm
	左 側 平 均	70.1mm	71.6mm	72.2mm	75.5mm	71.3mm
	右 左 平 均	71.0mm	72.2mm	73.6mm	76.0mm	72.1mm
	被 検 者	31 名	60 名	17 名	1 名	109 名

第 3 表 耳 翼 ノ 大 サ (其 2 幅徑)

性 別	年 齡 計 平均	被 檢 者 側 平均	60—69歲	70—79歲	80—89歲	90歲以上	合計 總平均
	被 檢 者 側 平均						
男 子	被 檢 者		38 名	53 名	12 名	1 名	104 名
	右 側 平 均		33.9mm	34.3mm	34.9mm	39.5mm	34.6mm
	左 側 平 均		33.4mm	33.4mm	34.7mm	38.0mm	33.6mm
	左 右 平 均		33.6mm	33.8mm	34.8mm	38.8mm	34.1mm
女 子	被 檢 者		31 名	60 名	17 名	1 名	109 名
	右 側 平 均		35.7mm	36.5mm	37.8mm	37.0mm	36.5mm
	左 側 平 均		34.4mm	35.5mm	35.9mm	36.5mm	35.2mm
	左 右 平 均		35.1mm	36.0mm	36.9mm	36.8mm	35.9mm

第 4 表 耳 翼 ノ 大 サ (其 3 最大長徑、最大幅徑)

徑 別	性 別	年 齡 側 別	60—69歲	70—79歲	80—89歲	90 歲 以 上
		側 別				
最 大 長 徑	男 子	右 側	82.0mm	83.5mm	84.0mm	81.5mm
		左 側	78.0mm	84.0mm	81.0mm	79.5mm
	女 子	右 側	82.0mm	82.0mm	86.0mm	76.5mm
		左 側	78.0mm	80.5mm	83.5mm	75.5mm
最 大 幅 徑	男 子	右 側	40.0mm	43.0mm	38.0mm	39.5mm
		左 側	37.5mm	39.0mm	37.5mm	38.0mm
	女 子	右 側	41.0mm	42.5mm	42.5mm	37.0mm
		左 側	39.0mm	40.0mm	40.0mm	36.5mm

第 5 表 耳 翼 ノ 大 サ (其 4)

A. 男 子 104 名

姓 名	年 齡	長 徑 (mm)		幅 徑 (mm)	
		右	左	右	左
高○代○	69	67	67	33	32.5
奥○伊○	70	71.5	70	33.5	31
榎○富○	72	77	76.5	33.5	33
刈○清○	81	75.5	75	34	35
中○廣○	75	73.5	71	31	33

笠○傳○	67	71	71	32.5	31
金○厚○	77	75	73.5	29	30
渡○喜○	75	69	67	34.5	32
池○貞○	74	78	75	32	31.5
齊○又○	78	64	63.5	32	30
赤○歌○	75	67	70.5	36	35
熊○金○	67	74	74	39	36

小○竹○	70	77	73.5	38	35
青○敬○	68	76	74.5	36	37
高○徳○	70	75	73.5	34.5	34
深○善○	67	73	69	32	31
山○常○	67	71.5	72.5	36	35.5
山○綱○	76	66.5	66	35	33
和○行○	76	67.5	70	28	29
川○巳○	80	66	64.5	35	31
河○海○	76	83	81	32.5	32.5
上○二○	60	68.5	68	33	33.5
松○龜○	77	78	75.5	35.5	33
榎○徳○	69	73	69.5	33.5	34
荒○竹○	69	70	69	35	33
宇○作○	69	75	76	33.5	33
西○七○	78	78	77.5	36	36.5
長○辨○	68	71	70.5	31	35
佐○清○	70	71	68	33.5	31
田○市○	84	78	76	37.5	35
長○長○	68	73.5	70.5	32.5	31
黒○伴○	71	80	81	40	38
杉○竹○	77	76	73	36	36
早○徳○	66	63.5	65	37	36
董○惣○	65	72.5	74	35	32.5
石○清○	70	74	67.5	31	34
渡○子○	69	71.5	71	38	37.5
白○藤○	64	68	67.5	33	32
久○鐵○	74	78	75	36	31
山○松○	79	68	68	26.5	26
野○喜○	101	81.5	79.5	39.5	38
船○常○	74	72.5	72	29	29
島○龜○	66	69	69	34	35
石○三○	70	83	83	36.5	33

鹽○小○	64	73	65	34.5	32
西○友○	76	78	78	33.5	33
森○常○	76	80	75	37	36
神○勇○	69	70	68	32.5	34
岩○董○	77	68	69	33	32
藤○直○	65	74	69.5	32.5	33
田○芳○	74	68	68	33.5	32
千○彦○	65	73.5	73.5	32	35.5
山○勇○	68	72.5	75.5	31	31
内○鐵○	72	80	78	36	35
柳○長○	77	81.5	81.5	37	37
中○清○	67	63	63	31	31.5
並○春○	63	74	78	40	36
山○爲○	68	68	72	35	29
白○重○	64	67	69	32	31.5
小○平○	65	64	67	32	33
藤○吉○	81	71	69	38	37.5
島○源○	68		77	28	32
高○松○	70	72	71.5	32	35
近○友○	70	71.5	69	33	34
渥○芳○	78	83.5	54	35	34
清○良○	63	72	73	36.5	35
長○久○	79	73	75	35.5	31
千○金○	60	75	75	35	35
尾○鶴○	71	72	71.5	32.5	32
野○要○	70	69	67.5	31	31
小○清○	68	82	77.5	37	36.5
八○長○	31	74	70.5	35.5	34
中○孝○	67	76.5	77.5	32	31.5
淺○寅○	66	70	71.5	31	32
渡○乙○	74	68.5	71.5	38	36.5
若○元○	69	66.5	67	35.5	34.5

塚○彌○	73	78	78	35.5	34.5
佐○新○	80	84	81	31.5	34
藤○直○	71	76	77.5	33.5	31
林○鎌○	70	73	72.5	43	39
牧○久○	64	63.5	62.5	36	32
中○庄○	76	76.5	78	30	33.5
赤○鎌○	75	77	73	37.5	38
京○金○	71	70	69.5	39.5	38
上○未○	76	78	77.5	39	38
船○兼○	74	74.5	69	33	31
丸○吉○	84	78	77	34.5	35
本○和○	75	76.5	72	33.5	33.5
山○道○	71	66	65	31	28
中○吉○	76	77.5	73.5	36.5	35
藤○宇○	66	76	72	32	32
太○善○	79	81	80	37	37
上○寅○	85	73	74.5	35	35
倉○與○	76	76	76	35	36
中○留○	82	81	78	36	36
吉○兵○	73	74	69	35	33
川○留○	87	71	70	33	32.5
坂○衡○	81	72.5	70.5	33.5	35
竹○専○	60	73	75	30	31
馬○金○	86	73	75	36	36.5
安○富○	78	76	73.5	32	31
松○芳○	78	80	76.5	38.5	38
秋○伊○	73	74	74.5	32	32.5
赤○猪○	65	74	74	39	35

B. 女 子 109 名

姓 名	年 齢	長 徑 (mm)		幅 徑 (mm)	
		右	左	右	左
宮○た○	85	66	58	42.5	39

荒○な○	84	68	69.5	36	36.5
神○た○	77	74	71.5	37.5	39
荻○フ○	68	74.5	72	40.5	39
石○か○	82	70.5	72	36	34
小○ハ○	69	78.5	76.5	37	36
長○テ○	75	77	75.5	36.5	35
三○ト○	68	64.5	61.5	30.5	32
高○な○	72	73.5	79.5	42.5	38.5
由○ト○	68	78	76.5	36	33.5
浅○ハ○	60	73	71	33.5	33.5
木○ツ○	82	83	83.5	33.5	36.5
増○フ○	72	77.5	73.5	42	40
今○ハ○	71	75	72	33	33.5
金○キ○	71	70	68.5	40	38
岡○ま○	74	71	68	32	36.5
藤○き○	72	73	71	33.5	35
櫻○き○	67	73	70	38.5	37.5
石○キ○	66	73.5	71.5	41	38.5
西○ハ○	69	62.5	61.5	32.5	33
藤○リ○	73	75.5	71	37	35
多○よ○	73	73	71	32	29
齋○と○	78	78	73	40	39
本○ま○	76	67	71	33	33
幾○み○	68	75	73	34	32
大○う○	79	82	80.5	37	33
石○き○	71	78.5	77	39	34.5
河○た○	72	69.5	69	37	37
岩○こ○	78	73	68.5	34.5	36
室○ふ○	71	69	65	33	35
江○フ○	75	75.5	73	33	33
青○カ○	64	67	65.5	32	30
平○ち○	77	68	65.9	36.5	38

前○き○	80	86	79	40	40
飯○い○	78	70	67	41.5	38.5
赤○よ○	69	75.5	69.5	38	37.5
石○ツ○	81	72	67	37.5	36
井○ナ○	74	70.5	67.5	33.5	38
柏○ち○	75	77	74	41	37
有○と○	80	81	76	37	35
森○ヤ○	69	68.5	65.5	37	34
島○ヤ○	78	76.5	75.5	37	37
野○ハ○	71	68	65.5	32	32
高○た○	67	76	71.5	36	36
岡○ゆ○	71	74.5	71	36	35.5
柴○ノ○	72	76.5	75.5	38	38
沖○喜○	73	77	76	37	34.5
田○き○	63	73.5	77	36	35.5
山○か○	75	76.5	75.5	38.5	35.5
關○い○	72	72.5	73	34	30.5
平○き○	85	74	71	36.5	35
玉○ま○	76	76.5	72	34	35
吉○か○	79	77.5	76	38.5	38.5
小○し○	76	74	73.5	37.5	36
沼○た○	73	71	73.5	34.5	32.5
藤○か○	68	73	72	36	35.5
梅○ハ○	78	69.5	67	35	36
中○も○	77	70	66.5	37	33
熱○と○	77	80	79.5	42.5	39
杉○ス○	76	68.5	69	35.5	34
成○ひ○	79	78	75.5	40	36
増○く○	73	63	61	35.5	33.5
市○フ○	78	72	70	36	38
佐○ち○	81	80.5	71.5	33.5	37
荒○い○	74	74	71	37	36

小○と○	80	79	73	36.5	35
土○と○	71	70	67	33.5	33
影○た○	71	66	68	36.5	35
藤○き○	65	68.5	70.5	33	31
藤○あ○	84	74	73	39	35
井○あ○	69	67	66	41	32.5
諸○ヤ○	70	72.5	73	36	31.5
松○く○	72	72.5	73	35	36
宮○ふ○	76	75.5	75.5	37	36
角○ひ○	67	66.5	66.5	34	34
吉○く○	74	76	70	37	35
友○り○	70	79.5	77	38	34.5
高○か○	64	67	63	32	32
辻○フ○	68	73	68.5	36	35
大○ゆ○	70	69	69	35	33.5
石○フ○	65	74	71	39	33
吉○う○	82	74.5	73.5	40	35
菅○ヤ○	75	71	72	36.5	36
林 と○	67	68.5	66	35	33
小○ひ○	68	75	73	34.5	34
佐○か○	72	73.5	71	36.5	32.5
高○せ○	79	81	78.5	36	36.5
佐○ヤ○	65	70	66.5	35.5	35
佐○ゆ○	70	71	74	35	35.5
石○カ○	68	75.5	74	34	34.5
石○ハ○	72	70	71	32	32
上○タ○	79	68.5	65	35.5	35.5
角○ワ○	79	68	71	35	36
松○ス○	63	71.5	67.5	32.5	32.5
八○ト○	71	69	68	33.5	39
大○ま○	78	66	72.5	37	31.5
山○公○	67	73	71	34	36

橋○ハ○	85	72.5	68.5	42	38
石○ナ○	84	70	71	32	33.5
山○ツ○	78	67	68.5	40	38.5
太○ペ○	64	68.5	66	38	35.5
野○と○	85	79	76	40	36
田○く○	81	74	72	38	36

石○ハ○	67	76	73	39.5	36.5
春○た○	84	70	72.5	37.5	33.5
石○こ○	68	82	78	36	35
松○よ○	67	66.5	69	33	33.5
池○き○	74	71	71	33.5	33
木○ゆ○	94	76.5	75.5	37	36.5

第 6 表

徑 別	長 徑 (最小及最大)		幅 徑 (最小及最大)	
著 者	シュワルベ	岡 野	シュワルベ	岡 野
性 別				
男 子	50—82mm	62—84mm	32—53mm	26—43mm
女 子	50—77mm	58—86mm	28—45mm	29—42.5mm

徑 別	平 均 長 徑 (mm)				平 均 幅 徑 (mm)			
著 者	シュワルベ		岡 野		シュワルベ		岡 野	
側 別	右	左	右	左	右	左	右	左
性 別								
男 子	65.9	65.5	73.4	72.6	39.2		34.6	33.6
女 子	62.3	61.5	72.9	70.4	36.2		36.5	35.2

第 7 表 70mm 以上ノ耳翼長徑ヲ有スル者

性 計	年齢計 數(mm) %	60—69歳	70—79歳	80—89歳	90歳以上	合 計
男 子	被 検 者	38 名	53 名	12 名	1 名	104 名
	70mm 以上ノ者	28 名	45 名	11 名	1 名	85 名
	百 分 比	73.7%	84.9%	91.7%	100%	81.7%
女 子	被 検 者	31 名	60 名	17 名	1 名	86 名
	70mm 以上ノ者	21 名	49 名	15 名	1 名	109 名
	百 分 比	67.7%	81.7%	88.2%	100%	78.9%
男 女 合 計	被 検 者	69 名	113 名	29 名	2 名	213 名
	70mm 以上ノ者	49 名	94 名	26 名	2 名	171 名
	百 分 比	71.0%	83.2%	89.7%	100%	80.3%
シュワルベ		36.3%	62.5%			

第 8 表 耳翼ノ畸形、腫瘍、其他ノ疾患

性. 計	病名		先天性耳瘻孔	過 剩 耳		耳血腫瘢痕		黄 色 腫		アテローム	
	側. 計										
男 子	右 側	2	0.7%	0	0	0	0	0	0	1	0.3%
	左 側	1	0.3%	1	0.3%	1	0.3%	0	0	2	0.7%
	兩 側	1	0.3%	0	0	1	0.3%	0	0	0	0
	計	4	1.4%	1	0.3%	2	0.7%	0	0	3	1.0%
女 子	右 側	2	0.7%	1	0.4%	0	0	0	0	0	0
	左 側	2	0.7%	0	0	0	0	2	0.7%	0	0
	兩 側	1	0.4%	0	0	0	0	1	0.4%	0	0
	計	5	1.8%	1	0.4%	0	0	3	1.1%	0	0
男 女 合 計		9	1.6%	2	0.4%	2	0.4%	3	0.5%	3	0.5%

第 9 表 耳聾栓塞 被檢者 562名 (男子 290名 女子 272名)

性別計	年代計		60—69歲		70—79歲		80—89歲		90歲以上		合 計	
	側別計											
男 子	右	側	5 名	4.8%	17名	11.6%	4 名	10.5%	0	0	26名	8.9%
	左	側	7 名	6.7%	8 名	5.5%	1 名	2.6%	0	0	16名	5.5%
	兩	側	17名	16.2%	18名	12.3%	7 名	18.4%	1 名	100.0%	43名	14.8%
	計		29名	27.6%	43名	29.5%	12名	31.6%	1 名	100.0%	85名	29.3%
女 子	右	側	9 名	10.1%	7 名	5.3%	2 名	4.0%	0	0	18名	6.6%
	左	側	6 名	6.7%	6 名	4.6%	3 名	6.0%	0	0	15名	5.5%
	兩	側	7 名	7.9%	6 名	4.6%	11名	22.0%	0	0	24名	8.8%
	計		22名	24.7%	19名	14.5%	16名	32.0%	0	0	57名	20.9%
男 女 總 計			51名	26.3%	62名	22.4%	28名	31.8%	1 名	33.3%	142名	25.3%

第 10 表 外 聽 道 炎 並 ニ 其 痕 跡

性別計	病名別		急性限局性炎		慢性彌蔓性炎		痕跡	
	側別計							
男 子	右	側	2 名	0.7%	1 名	0.3%	1 名	0.3%
	左	側	1 名	0.3%	0	0	0	0
	兩	側	0	0	1 名	0.3%	0	0
	計		3 名	1.0%	2 名	0.7%	1 名	0.3%

女 子	右 側	3 名	1.1%	3 名	1.1%	3 名	1.1%
	左 側	2 名	0.7%	0	0	0	0
	兩 側	0	0	0	0	0	0
	計	5 名	1.8%	3 名	1.1%	3 名	1.1%
男 女 計		8 名	1.4%	5 名	0.9%	4 名	0.7%

第 11 表 鼓 膜 ノ 反 射 光 錐 消 失 者

性 別 計	年代別. 計	60—69歳		70—79歳		80—89歳		90歳以上		合 計	
	症例数 百分比 側別計	症例数	60代ノ男 女各及總 被檢者ニ 對スル%	症例数	70代ノ男 女各及合 計被檢者 ニ對スル%	症例数	80代ノ男 女各及合 計被檢者 ニ對スル%	症例数	90以上ノ 男女各及 計被檢者 ニ對スル%	症例数	男女各及 總計ノ被 檢者ニ對 スル%
男 子	右 側	11	10.5	13	8.9	3	7.9	0	0	27	9.3
	左 側	12	11.4	16	10.9	4	10.5	0	0	32	11.0
	兩 側	24	22.9	43	29.5	13	34.2	1	100.0	81	27.9
	計	47	44.8	72	49.3	20	52.6	1	100.0	140	48.3
女 子	右 側	6	6.7	14	10.7	1	2.0	1	50.0	22	8.1
	左 側	5	5.6	17	12.9	3	6.0	0	0	25	9.2
	兩 側	25	28.1	39	29.8	26	52.0	1	50.0	91	33.5
	計	36	40.4	70	53.4	30	60.0	2	100.0	138	50.7
男 女 合 計	右 側	17	8.8	27	9.7	4	4.5	1	33.3	49	8.7
	左 側	17	8.8	33	11.9	7	7.9	0	0	57	10.1
	兩 側	49	25.3	82	29.6	39	44.3	2	66.7	172	30.6
	計	83	42.8	142	51.3	50	56.8	3	100.0	278	49.5

第 12 表 中 耳 ノ 諸 疾 患

性 別 計	病種別 側別計	歐氏管狭窄		急性中耳炎		急性乳突突起炎		慢性中耳炎		中 耳 炎 症	
男 子	右 側	24名	8.3%	1名	0.34%	1名	0.34%	2名	0.7 %	9名	3.1 %
	左 側	11名	3.8%	1名	0.34%	1名	0.34%	3名	1.03%	9名	3.1 %
	兩 側	23名	7.9%	1名	0.34%	0	0	2名	0.7 %	1名	0.34%
	計	58名	20.0%	3名	1.03%	2名	0.7 %	7名	2.4 %	19名	6.6 %
女 子	右 側	27名	9.9%	0	0	0	0	3名	1.1 %	9名	3.3 %
	左 側	16名	5.9%	4名	1.5 %	2名	0.7 %	2名	0.7 %	10名	3.7 %
	兩 側	25名	9.2%	0	0	0	0	0	0	1名	0.4 %
	計	68名	25.0%	4名	1.5 %	2名	0.7 %	5名	1.8 %	20名	7.4 %
男 女 合 計		126名	22.4%	7名	1.2 %	4名	0.7 %	12名	2.1 %	39名	6.9 %

岡野＝本邦高齢者ノ耳鼻咽喉科領域ニ於ケル臨牀所見ノ統計的觀察(其一)
耳鼻咽喉科領域全般ニ亘ル臨牀所見

43—847

第 13 表 中耳諸疾患相互ノ頻度 (總計 188例)

性別、計		病種別		歐氏管狹窄		急性中耳炎		急性乳嚢突起炎		慢性中耳炎		中耳炎 殘 胎 症	
男	子	58例	30.9%	3例	1.6%	2例	1.1%	7例	3.7%	19例	10.1%		
女	子	68例	36.1%	4例	2.1%	2例	1.1%	5例	2.7%	20例	10.6%		
合	計	126例	67.0%	7例	3.7%	4例	2.1%	12例	6.4%	39例	20.7%		

第 14 表 各年代ニ於ケル歐氏管狹窄患者

性別 計	年代別、計		60—69歳		70—79歳		80—89歳		90歳以上		合 計	
	症例数 側 計	百分比	症例数 60歳代ノ 被檢者數ニ 對スル%	被檢者數	症例数 70歳代ノ 被檢者數ニ 對スル%	被檢者數	症例数 80歳代ノ 被檢者數ニ 對スル%	被檢者數	症例数 90歳以上ノ 被檢者數ニ 對スル%	被檢者數	症例数 被檢者 總數ニ 對スル 百分比	被檢者數
男 子	右 側		8	7.6	14	9.6	2	5.3	0	0	24	8.3%
	左 側		5	4.8	5	3.4	1	2.6	0	0	11	3.8%
	兩 側		10	9.5	12	8.2	1	2.6	0	0	23	7.9%
	計		23	21.9	31	21.2	4	10.5	0	0	58	20.0%
女 子	右 側		7	7.9	14	10.7	5	10.0	1	50.0	27	9.9%
	左 側		6	6.7	10	7.6	0	0	0	0	16	5.9%
	兩 側		9	10.1	12	9.2	4	8.0	0	0	25	9.2%
	計		22	24.7	36	27.5	9	18.0	1	50.0	68	25.0%
男 女 合 計			45	23.2	67	24.2	13	14.8	1	33.3	126	22.4%

第 15 表 慢性化膿性中耳炎

著 者	調 査 場 所	被 檢 人 員	症 例	百 分 比
吉井、千田	東京市養育院	104	10	9.6
高 越	岡山市學童	1270	64	5.0
久 保	福岡市學童	1000	39	3.9
西	熊本市學童	17747	496	2.8
吉 田	東京市學童	8073	172	2.1
大 澤	東京市學童	3482	91	2.6
岡 野	浴 風 閣	562	12	2.1

第 16 表 自覺的ニ難聴ヲ訴ヘタル者

性 別 計	年代別. 計	60—69歳		70—79歳		80—89歳		90歳以上		合 計	
	症例数 百分比 側別計	症例数	60代ノ被 檢者數ニ 對スル%	症例数	70代ノ被 檢者數ニ 對スル%	症例数	80代ノ被 檢者數ニ 對スル%	症例数	90以上ノ 被檢者數 ニ對スル %	症例数	男女各及 ビ總被檢 者ニ對ス ル%
男 子	右 側	2	1.9	4	2.7	0	0	0	0	6	2.1
	左 側	5	4.8	13	8.9	1	2.6	0	0	19	6.6
	兩 側	17	16.2	40	27.4	19	50.0	1	100.0	77	26.6
	計	24	22.9	57	39.0	20	52.6	1	100.0	102	35.2
女 子	右 側	7	7.9	10	7.6	1	2.0	0	0	18	6.6
	左 側	2	2.2	11	8.4	0	0	0	0	13	4.8
	兩 側	17	19.1	33	25.2	25	70.0	2	100.0	87	31.9
	計	26	29.2	54	41.2	36	72.0	2	100.0	118	43.4
男 女 合 計	右 側	9	4.6	14	5.1	1	1.1	0	0	24	4.3
	左 側	7	3.6	24	8.7	1	1.1	0	0	32	5.7
	兩 側	34	17.5	73	26.4	54	61.4	3	100.0	164	29.2
	計	50	25.8	111	63.6	56	63.6	3	100.0	220	39.1

第 17 表 鼻 中 隔 形 態 異 常 (其1)

病 種	症例数. 百分比	症 例 数			男女各々並ニ總被檢者ニ對スル 百 分 比		
	性別. 計 病側. 計	男 子	女 子	男女合計	男 子	女 子	男女合計
彎 曲 症	右 側	60	30	90	20.7	11.0	16.0
	左 側	88	53	141	30.3	19.5	25.1
	S 狀 彎	7	3	10	2.4	1.1	1.8
	小 計	155	86	241	53.4	31.6	42.9
彎曲並ニ槓	右 側	12	9	21	4.1	3.3	3.7
	左 側	21	25	46	7.2	9.2	8.2
	小 計	33	34	67	11.3	12.5	11.9
	合 計	188	120	308	64.7	44.1	54.8
槓	右 側	10	14	24	3.4	5.1	4.3
	左 側	15	22	37	5.2	8.1	6.6
	兩 側	15	42	57	5.2	15.4	10.1
	計	40	78	118	13.8	28.6	21.0

岡野＝本邦高齢者ノ耳鼻咽喉科領域ニ於ケル臨牀所見ノ統計的觀察(其一)
耳鼻咽喉科領域全般ニ亘ル臨牀所見

43-849

棘	右側	0	2	2	0	0.7	0.4
	左側	2	1	3	0.7	0.4	0.5
	兩側	0	0	0	0	0	0
	計	2	3	5	0.7	1.1	9.9
鼻中隔異常者總計		230	201	431	79.3	73.9	76.7

第 18 表 鼻中隔形態異常 (其2)

病 種	症例数 百分比		症 例 数	百 分 比
	型	側別計		
彎曲症及 彎曲兼櫛	C 型		298	53.0
	S 型		10	1.8
	計		308	54.8
櫛	一側		61	10.9
	兩側		75	10.1
	計		118	20.9
棘	一側		5	0.9
	兩側		0	0
	計		5	0.8
鼻中隔異常者總計			431	76.7

第 19 表 鼻中隔ニ見ラレタル諸種疾患

性別・計	病種 症例数%		中隔形態 異常	微毒 性患	瘰 癧	原因不詳ノ 中隔穿孔	癒着症	中隔結節
	症例数	%						
男 子	症 例 数		230	3	1	1	1	4
	男子被檢者ニ對 スル百分比		79.3	1.0	0.3	0.3	0.3	1.4
女 女	症 例 数		201	0	0	5	0	1
	女子被檢者ニ對 スル百分比		73.9	0	0	1.8	0	0.4
男女合計	症 例 数		431	3	1	6	1	5
	總被檢者ニ對ス ル百分比		76.7	0.5	0.2	1.1	0.2	0.9

岡野＝本邦高齢者ノ耳鼻咽喉科領域ニ於ケル臨牀所見ノ統計的觀察(其一)
耳鼻咽喉科領域全般ニ亙ル臨牀所見

第 20 表 鼻腔並ニ副鼻腔ノ炎症性疾患及ヒ其他ノ疾病

性別・計	病 種 側別・計	急性單純性鼻炎		慢性單純性鼻炎		慢性肥厚性鼻炎		萎縮性鼻炎		眞正臭鼻症		鼻 茸		慢性副鼻腔炎		篩骨膿	
		症例數 百分比	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %
男 子	右 側	0	0	0	0	34	11.7	0	0	0	0	10	3.4	7	2.4	11	3.8
	左 側	0	0	0	0	17	5.9	2	0.7	0	0	6	2.1	6	2.1	1	0.3
	兩 側	10	3.4	28	9.7	34	11.7	7	2.4	0	0	4	1.3	4	1.3	8	2.8
	計	10	3.4	28	9.7	85	29.3	9	3.1	0	0	20	6.9	17	5.9	20	6.9
女 子	右 側	0	0	0	0	33	12.1	1	0.4	0	0	3	1.1	8	2.9	3	1.1
	左 側	0	0	0	0	13	4.8	1	0.4	0	0	0	0	7	2.6	3	1.1
	兩 側	12	4.4	34	12.5	52	19.1	8	2.9	2	0.7	7	2.6	6	2.2	15	5.5
	計	12	4.4	34	12.5	98	36.0	10	3.7	2	0.7	10	3.7	21	7.7	21	7.7
男女合計	右 側	0	0	0	0	67	11.9	1	0.2	0	0	13	2.3	15	2.7	14	2.5
	左 側	0	0	0	0	30	5.3	3	0.5	0	0	6	1.1	13	2.3	4	0.7
	兩 側	22	3.9	62	11.0	86	15.3	15	2.7	2	0.4	11	2.0	10	1.8	23	4.1
	合 計	22	3.9	62	11.0	183	32.6	19	3.4	2	0.4	30	5.3	38	6.8	41	7.3

第 21 表 副 鼻 腔 ノ 炎 症 性 疾 患

性別・計	病 種 側別・計	上顎竇蓄膿症		前額竇蓄膿症		篩骨蜂窩膿症		蝴蝶蝶竇膿症		全副鼻腔蓄膿症	
		症例數 百分比	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %	症例數 %
男 子	右 側	6	2.1	1	0.3	0	0	0	0	0	0
	左 側	6	2.1	0	0	0	0	0	0	0	0
	兩 側	1	0.3	3	1.0	0	0	0	0	0	0
	計	13	4.5	4	1.3	0	0	0	0	0	0
女 子	右 側	6	2.2	1	0.4	0	0	0	0	1	0.4
	左 側	3	1.1	2	0.7	2	0.7	0	0	0	0
	兩 側	5	1.8	1	0.4	0	0	0	0	0	0
	計	14	5.1	4	1.5	2	0.7	0	0	1	0.4
男 女 合 計	右 側	12	2.1	2	0.4	0	0	0	0	1	0.2
	左 側	9	1.6	2	0.4	2	0.4	0	0	0	0
	兩 側	6	1.1	4	0.7	0	0	0	0	0	0
	合 計	27	4.9	8	1.4	2	1.4	0	0	1	0.2

第 22 表 咽頭ノ炎症性疾患及ヒ腫瘍其他

性別計	病種 症例数 %	急性 咽頭炎	慢性 咽頭炎	微毒性 疾患	口蓋扁桃 腺肥大	舌根扁桃 腺肥大	振子様 扁桃腺	咽頭 腫	舌根 腫	二裂性 懸壺垂
男子	症 例 数	3	23	5	2	1	1	2	1	1
	被檢男子ニ對 スル百分比	1.0	7.9	1.7	0.7	0.3	0.3	0.7	0.3	0.3
女子	症 例 数	10	53	2	4	4	0	2	0	0
	被檢女子ニ對 スル百分比	3.7	19.5	0.8	1.5	1.5	0	0.8	0	0
男女 合計	症 例 数	13	76	7	6	5	1	4	1	1
	總被檢者ニ對 スル百分比	2.3	13.5	1.3	1.1	0.9	0.2	0.7	0.2	0.2

第 23 表 諸 種 慢 性 咽 頭 炎

性別計	病 種 計 症例数 %	單純性咽頭炎	顆粒性咽頭炎	乾燥性咽頭炎
男 子	症 例 数	18	4	1
	↑ 慢性咽頭炎患者 ニ對スル 百分比	78.3	17.4	4.4
	被檢男子ニ對 スル 百分比	6.2	1.3	0.3
女 子	症 例 数	32	19	2
	↓ 慢性咽頭炎患者 ニ對スル 百分比	60.4	35.9	3.8
	被檢女子ニ對 スル 百分比	11.8	6.9	0.8
男 女 合計	症 例 数	50	23	3
	慢性咽頭炎患者總數 ニ對スル 百分比	65.8	30.3	3.9
	總被檢者ニ對 スル 百分比	8.9	4.1	0.5

第 24 表 喉頭ノ炎症性疾患及ヒ腫瘍其他

性別計	病種 症例数 %	急性 喉頭炎	慢性 喉頭炎	微毒性 疾患	假聲帶 肥大	囊腫	癌腫	迴歸神經 不全麻痺	兩側後 筋麻痺	Ω型會 厭軟骨	氣管 隔膜
男子	症 例 数	0	1	2	5	10	1	1	1	30	1
	被檢男子ニ對 スル 百分比	0	0.3	0.7	1.7	3.4	0.3	0.3	0.3	10.3	0.3
女子	症 例 数	2	1	2	6	2	0	0	0	11	0
	被檢女子ニ對 スル 百分比	0.8	0.4	0.8	2.2	0.8	0	0	0	4.1	0
男女 合計	症 例 数	2	2	4	11	12	1	1	1	41	1
	總被檢者ニ對 スル 百分比	0.4	0.4	0.7	2.0	2.1	0.2	0.2	0.2	7.3	0.2

筆ヲ擱クニ當リ恩師増田教授ノ御懇篤ナル御指導ト御校閲トヲ深謝シ。
併セテ本研究ニ際シ多大ノ御便宜ト御助力トヲ賜ハリタル浴風園醫長尼
子博士並ニ職員御一同ニ對シ衷心ヨリ感謝ノ意ヲ表ス。

(本稿論文ノ大要ハ大日本耳鼻咽喉科會總會並ニ同東京地方會席上ニ於テ發表セルモノナリ)。

主 要 文 献

- 1) 尼子: 老年者ノ消化機能ニ就テ。日消化會誌。第34卷, 第4號。 2) 菅原: 下鼻甲介ノ老性變化ニ就テ。大日耳鼻。第34卷, 732頁。 3) A. A. Alexander: Nasenpolypen in ihren Beziehungen zu den Empyema der Nasennebenhöhlen. Arch. f. Laryng. Bd. 5, S. 325. 4) Berberich: Cholesterin-Stoffwechsel und Gehörorgan. Deutsche med. Wochenschr. 1924, 54, 514. 5) Derselbe: Über rezidivierende Ceruminalpfröpfe. Zeitschr. f. H. N. u. O. Bd. 12, S. 448, 1925. 6) Bezold: Lehrbuch d. Ohrenheilkunde. S. 63, 1906. 7) Bryant: Die Ohrtrumpete, ihre Anatomie usw. Arch. f. O. N. u. K. Bd. 72, S. 136. 8) A. Denker und O. Kahler: Handbuch der Hals-Nasen-Ohrenheilkunde. 1926. 9) 原田: 「アイヌ」人及北海道函館市學齡兒童ニ行ヒタル懸壜垂披裂ニ就キテノ統計的觀察。大日耳鼻。第36卷, 837頁。 10) 原田: 「アイヌ」人種ニ行ヒタル耳鼻咽喉科領域ニ於ケル臨牀的觀察。大日耳鼻。第36卷, 813頁。 11) F. Henke und O. Lubarsch: Handbuch d. spez. patholog. Anatomie u. Histologie. III/I Atmungswege und Lungen. IV/I Rachen und Tonsillen usw. 12) Heymann: Handbuch d. Laryngologie u. Rhinologie. III Bd. S. 441. 13) 平川: 二三ノ耳翼畸形。實驗醫報。 14) 伊藤: 耳鼻咽喉科疾患ニ於ケル「ヒヨロステリン」測定ニ就テ。大日耳鼻。第36卷, 1327頁。 15) 窪田: 鼻中隔彎曲症ノ統計的觀察。大日耳鼻。第35卷, 995頁。 16) 松井: 喉頭軟骨ノ石灰化研究。大日耳鼻。第29卷, 第1號。 17) Moos: Anatomie und Physiologie der Eustachischen Röhre. 1882. 18) 永井: 學齡兒童ノ懸壜垂披裂ニ關スル知見。耳喉。第5卷, 631頁。 19) 長井: 先天性耳瘻管ニ就テ。大日耳鼻。第28卷, 214頁。 20) 中山: 日本人ノ喉頭軟骨ハ如何ニ化骨スルカ。京都醫會誌。第5卷。 21) 根尾: 沖繩縣ニ於ケル先天性耳瘻孔ノ統計的觀察。耳喉。第4卷, 106頁。 22) 西: 九州(熊本)兒童ノ耳鼻咽喉ノ形態並ニ疾患診查成績。大日耳鼻。第39卷。 23) 岡島: 機關車乘務員ノ耳鼻咽喉科領域疾病ニ關スル統計的觀察。大日耳鼻。第27卷, 460頁。 24) 奥山: 喉頭軟骨ノ化骨ニ就テ。大日耳鼻。第36卷, 765頁。 25) Onodi: Über kongenitale Ohrfisteln. Arch. f. O. Bd. 102, S. 128, 1918. 26) 大澤: 小學兒童耳鼻咽喉科疾患ノ統計的觀察。大日耳鼻。第36卷, 784頁。 27) Rüdinger: Über anomales Offensein der Tuba Eustachii bei alten Leute. Monatschr. f. Ohrenheilk. 1868, S. 137. 28) 佐山: 支那人喉頭軟骨ノ化骨ニ就テ。滿洲醫誌。第14卷, 721頁。 29) G. Schwalbe: Lehrbuch der Anatomie des Ohres. 1887. 30) Derselbe: Handbuch der Anatomie des Menschen (v. Bardeleben) VBd. II. Abteilung. 31) 高越: 耳鼻咽喉科領域ニ於ケル學齡兒童ノ主要疾病調查報告。大日耳鼻。第27卷, 381頁。 32) 高坂: 壯丁者ニ於ケル鼻中隔彎曲症ノ統計的觀察。大日耳鼻。第41卷, 1096頁。 33) 津田: 本邦人鼻中隔畸形ノ統計。大日耳鼻。第21卷, 1079頁。 34) 鶴田: 小學兒童ノ耳聾栓塞ニ就テ。研瑤誌。第102號。 35) 内田: 支那人耳翼ニ就テ人類學的及ビ形態學的研究。大日耳鼻。第34卷, 680頁。 36) Urbantschitsch: Lehrbuch d. Ohrenheilkunde, 1910. 37) 舘淵: 歐氏管狹窄症。大日耳鼻。第38卷, 193頁。 38) 吉田: 兒童耳鼻咽喉科疾患ノ統計的觀察。大日耳鼻。第33卷, 606頁。 39) 吉井: 歐氏管ノ形狀及ビ大小ニ就テ。大日耳鼻。第16卷, 1頁。 40) 吉井, 千田: 東京市養育院學齡兒童ノ耳鼻咽喉科領域檢査。大日耳鼻。第23卷, 225頁。 41) 吉原: 鼻茸ト慢性上顎竇炎。大日耳鼻。第23卷, 225頁, 大日耳鼻。第40卷, 305頁。 42) Zarniko: Die Krankheiten der Nase und d. Nasenrachen. S. 282. 43) Zuckerkandl: Beitrag zur Anatomie der Ohrtrumpete, 1906.

(其 一 終 ヲ)

(原稿到着=昭和11・12・1)